

# 藤原定家『下官集』伝本の研究(一)

―模刻本・国文学研究資料館蔵『定家卿書式』を中心に―

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻

吉田紀恵子

## 要 旨

藤原定家『下官集』は、「一 書始草子事」「一 嫌文字事」「一 仮名字かきつゝくる事」「一 書哥事」「一 草子付色々符事 和漢有之」の五条から成る、最初に成文化された和歌書記の作法書である。

管見ではあるが、二十七本の『下官集』伝本(模刻本・二本、写本・二十五本)を調査し、内容を比較した結果、書名のみならず、一部の伝本を除き、五条構成という点は共通するが、内容および書式も一定とは言えず、誤読および誤写から生じたとは考えられない差異も存在することが解った。そのため、複数の『下官集』祖本の存在も考えられる。しかも、定家自筆『下官集』の存在についての報告は未だ無い。したがって、研究を進めるに際し、定家自筆『下官集』に代わり、基盤となる伝本の確定が重要である。

先行研究に於いて、国語学の領域から吉沢義則氏及び大野晋氏、国文学からは浅田徹氏が、模刻本・大東急記念文庫蔵『定家卿模本』を、本文の内容の優秀性および、伝本中唯一、「定家様」と称される、定家独自の書風で記されていることを根拠として、『下官集』研究の最善本と位置付けている。

此の模刻本・大東急記念文庫蔵『定家卿模本』の冒頭、即ち本文の前に、「三藐院関白臨定家卿書」、即ち、定家自筆本を、三藐院関白近衛信尹が臨書した、と言う由来を示す題名が記されているが、この『下官集』本文には、定家の署名および書写年月日は記載されていない。しかし、稿者は、この模刻本の由来、更に、書風が定家独自の書風、即ち、後世、「定家様」と称される書風であることに注目した。

古来、定家の書風は「定家様」として尊重されてきたが、その書風が年齢により変化していたことは、一般的には知られていなかった。しかし、定家の書風の変化については、既に、稿者の師・飯島春敬氏(書家)が注目し、現在、名児耶明氏・島谷弘幸氏らにより立証されている。

従がって、本稿では、現存する若年から老年に至る、執筆年あるいは執筆時期の判明している定家真筆の書風と、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』および同一の模刻本・国文学研究資料館蔵『定家卿書式』の書風を比較し、模刻本の原本である定家自筆『下官集』執筆時期の推定を行う。その結果を受け、これら模刻本を『下官集』研究の基準となり得る伝本と位置付け、これを基盤として、藤原定家『下官集』の研究を進める。

キーワード：藤原定家 『下官集』 定家様 三藐院関白臨定家卿書 三藐院近衛信尹

はじめに

- 一. 藤原定家『下官集』伝本
- 二. 『下官集』模刻本「三藐院関白臨定家卿書」
  - I 国文研本『定家卿書式』全文翻刻
  - II 国文研本『定家卿書式』本文
  - III 国文研本『定家卿書式』奥書群および刊記
- 三. 法帖「三藐院関白臨定家卿書 一帖」
- 四. 藤原定家自筆『下官集』と能書・近衛信尹
- 五. 「三藐院関白臨定家卿書」と名彫師・井上慶寿
- 六. 藤原定家の書風と定家自筆『下官集』執筆時期  
おわりに

## はじめに

『下官集』は、歌人、歌学者、更に、その古典書写活動においても高い評価を得ている、藤原定家(一一六二—一二四一)の著作の一つである。その書名『下官集』は、本文中に見られる「下官(自らを謙遜する語)」に因む、後世の命名である。

『下官集』は基本的に、「一 書始草子事」、「一 嫌文字事」、「一 仮名字かきつゝくる事」、「一 書哥事」、「一 草子付色々符事 和漢有之」の五条構成である。その内容は草子(冊子)に和歌を書記するための最初の成文化された作法書である。小川剛生氏は、「定家にいたって、写本の書記法らしきものが確立したことは注目される」<sup>(1)</sup>と述べる。

『下官集』という書名は、先行研究において、大野晋氏が『下官集』伝本の一つである「定家本 大東急記念文庫蔵」(大東急記念文庫蔵『定家卿模本』)本文の始めに「僻案」と記されていることを踏まえ、「私の

研究では、慣用に従って下官集とするが、『僻案』と改めるのが定家の命名にかなうものであろう。」<sup>(2)</sup>と述べ、他方、浅田徹氏は、定家の著作に嘉禄二年(一二二六)成立の注釈書『僻案抄』があり、「紛らわしくなるので」<sup>(3)</sup>『下官集』とされる。これに倣い、本稿に於いても、『下官集』とする。

主要な先行研究では、国語学から一九二一年に吉沢義則氏<sup>(4)</sup>、一九六一年に大野氏<sup>(5)</sup>、国文学からは、二〇〇〇年に浅田氏<sup>(6)</sup>が紹介された『下官集』伝本の内、定家の署名および書写年月日が無いにも拘わらず、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』(模刻本)を最善本と位置付けられている。

大野氏は、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』について「文字は、定家自筆の明月記・奥儀抄卷余その他のものと同一であり、欄外の頭注の書き様、本文への書き込みなどを見ると、これは、定家の自筆本をそのままに臨模したものと見て差支えなさそうである。」<sup>(7)</sup>、浅田氏は「模刻本の印象は確かに定家筆を思わせ、書入れなどの生々しさ、本文の優秀性もそれに矛盾していない」<sup>(8)</sup>と述べられている。即ち、模刻本の本文の優秀性と、「定家様」と称される定家独自の書風で記されていることを根拠としている。しかし、この模刻本の祖本、即ち、定家自筆『下官集』の存在については、寡聞にして知らない。

尚、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』には、同一の版本から興された橋本進吉氏旧蔵本が存在する。この模刻本については、浅田氏が「下官集の諸本―付・大東急記念文庫蔵『定家卿模本』翻刻―」(『国文学研究資料館紀要』第二十六号、二〇〇〇年)では未見の伝本とし、「大東急記念文庫蔵『定家卿模本』(下官集)について」(『かがみ』第三号、二〇〇三年)では国文学研究資料館の所蔵となったことを記し、二〇一一年『国文学研究資料館報』第五七号「新収資料紹介」では本文の一部の写真を添えて、国文学研究資料館蔵『定家卿書式』、として紹介されている。

稿者は、浅田氏の先行研究等を手引きとして所蔵先を訪ね、二十七本の『下官集』伝本、即ち、二本の模刻本（大東急記念文庫蔵『定家卿模本』および国文学研究資料館蔵『定家卿書式』）と二十五本の写本、計二十七本の伝本を管見ではあるが調査し、比較検討した。その結果、書名のみならず『下官集』本文の内容および書式も一定とは言えず、誤読及び誤写から生じたとは考えられない差異も存在することが判明した。

しかも、『下官集』研究を進める上で基準となる、定家自筆『下官集』の存在は不明であり、二十五本の写本の内、定家生前の年号を持つ五本の写本間に見られる差異も看過できない。稿を改めて論じるが、この差異は定家が目的・状況等に合わせ、より良き作法書を目指して、『下官集』を書き直していた可能性、即ち、複数の『下官集』祖本の存在を示唆するものであろう。尚、定家生前の年号を持つ五本の写本については、本稿「二六・藤原定家の書風と定家自筆『下官集』執筆時期」で簡略に紹介する。したがって、『下官集』伝本の研究を進めて行く為には、現在、その存在が未詳である定家自筆『下官集』に代わる、基準伝本の設定が不可欠である。稿者は、同一の版本から興された二本の模刻本、即ち、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』および国文学研究資料館蔵『定家卿書式』に注目した。

この二本の模刻本は、定家の署名および書写年月日が無いとは言え、定家自筆『下官集』を底本として「江戸初期の三筆」の一人と称される能書が臨書し、これを幕末の名彫師が鋳した版本である。その臨書は、祖本である定家自筆『下官集』を本文の内容のみならず、「定家様」と称される定家独自の書風そのままに再現した信頼性の高い版本といえる。

これら模刻本の執筆時期を特定し、基準となる伝本と裏付けるために、『群書一覽 二』法帖部「三藐院関白臨定家卿書 一帖」（享和二、一八〇二刊）に法帖として紹介され、その存在が示されていることに言

及する。これに加え、定家自筆『下官集』を臨書した能書・三藐院近衛信尹及び、その臨書を鋳した名彫師・井上慶寿の業績を調査し、更なる信頼の裏付けとする。

さらに稿者は、これら模刻本の書風が「定家様」であることに着目した。定家の書風は古来、「定家様」と称されてきた。しかし、その定家独自の書風が、現存する定家若年の書と、壮年期の書とは異なっていることは一般的には知られていなかった。この定家の書風の変化について、飯島春敬氏（書家）が注目し、現在、名児耶明氏・島谷弘幸氏らにより、立証され、系統の具体化も行われている。

本稿では、この定家の書風の変化に注目し、執筆年、あるいは執筆時期が判明している定家真筆の書風と、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』および国文学研究資料館蔵『定家卿書式』の書風を比較し、これら二本の模刻本の祖本、即ち、現存しない定家自筆『下官集』の執筆時期を特定する。

研究を進めるに当り、本稿では、模刻本の伝本名を、次のように記す。

\*大東急記念文庫蔵『定家卿模本 斎藤蔵』（三一―二五―一五五三）

・・・大東急本『定家卿模本』

\*国文学研究資料館蔵『定家卿書式 三藐院殿臨書』（八八―一一）

・・・国文研本『定家卿書式』

また、主要な先行研究については、次のように記す。

\*大野晋『仮名遣と上代語』（岩波書店、一九八二年）：大野（一九八二）

\*浅田徹「下官集の諸本―付・大東急記念文庫蔵『定家卿模本』翻刻―

（『国文学研究資料館紀要』第二六号、二〇〇〇年）：浅田（二〇〇〇）

\*浅田徹「下官集の定家―差異と自己―」（『国文学研究資料館紀要』第

二七号、二〇〇一年）：浅田（二〇〇一）

\*浅田徹「大東急記念文庫蔵『定家卿模本』（下官集）について」（『かがみ』

第三六号、二〇〇三年）：浅田（二〇〇三）

\*遠藤和夫「親行本『下官集』考」(『国學院雜誌』第一〇八巻 第一一号、二〇〇七年)・・・遠藤(二〇〇七)

## 一・藤原定家『下官集』伝本

藤原定家『下官集』は、基本的に、「一 書始草子事」、「一 嫌文字事」、「一 仮名字かきつゝくる事」、「一 書哥事」、「一 草子付色々符事 和漢有之」の五条から成る。その内容から言えば、最初に成文化された、草子(冊子)に和歌を書記するための作法書である。即ち、定家の書写活動とも関わりのある著作である。

しかし、定家没後、『下官集』五条の内、定家独自の仮名遣を記した「一 嫌文字事」の条のみが「定家仮名遣」と評価された。現在に至っては、仮名遣の嚆矢として、国語学の領域に於ける研究対象である。浅田(二〇〇〇)では、「下官集は紛れもなく定家歌学の資料であるが、その面から見た検討はほとんどないように思われるのである」と述べられている。そして、稿者は、華麗な書道芸術の場となっていた写本を、歌書作成の場とするために、『下官集』が執筆されたと考えている。

残念なことに、定家自筆『下官集』の存在は、未だ不明である。その為、浅田(二〇〇〇)を始めとする参考文献を頼りとして、所蔵先を訪ね、管見ではあるが、二十七本の『下官集』伝本の存在を確認し、調査をした。

調査済『下官集』伝本は、次の通りである。

- 1、金沢文庫保管 親行本『下官集』(『九条錫杖(巻頭下官集)』)・写本
- 2、京都大学付属図書館蔵 平松家本『西行上人談抄』・写本
- 3、京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『定家卿書式』模本・写本
- 4、京都女子大学蔵『豫楽院歌学書』・写本
- 5、宮内庁書陵部蔵『麒麟抄』所収本・写本
- 6、宮内庁書陵部蔵「続群書類従巻八『麒麟抄』」所収本・写本
- 7、宮内庁書陵部蔵 鷹司本『竹園抄 完』・写本

- 8、国文学研究資料館蔵『定家卿書式』・模刻本
- 9、国文学研究資料館蔵『或秘書』・写本
- 10、国文学研究資料館蔵『詠歌聞書』・写本
- 11、国文学研究資料館蔵『秘書百箇条』(京極中納言入道説)・写本
- 12、国文学研究資料館蔵『倭歌作法』・写本
- 13、国立歴史民俗博物館蔵 高松宮家伝来禁裏本『西行上人談抄』・写本

- 14、国立歴史民俗博物館蔵 高松宮家伝来禁裏本『和歌愚僻抄』・写本
- 15、国文学研究資料館蔵『仮名文字遣』・写本
- 16、三康図書館蔵『和歌会次第』・写本
- 17、聖護院蔵『仮名遣定家卿』・写本
- 18、島原図書館松平文庫蔵『下官抄』・写本
- 19、水府明德会彰考館蔵『会席作法』・写本
- 20、水府明德会彰考館蔵『和歌玉屑抄』・写本
- 21、静嘉堂文庫蔵『下官集』・写本
- 22、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』・模刻本
- 23、天理大学付属天理図書館蔵『僻案』・写本
- 24、東京大学国語研究室蔵 九条家旧蔵本『詠歌大概 下官集』・写本
- 25、東京大学国語研究室蔵 新宮城所蔵本『下官集 山塊雜記』・写本
- 26、ノートルダム清心女子大学付属図書館 黒川文庫蔵『和歌玉屑抄』・写本
- 27、陽明文庫蔵『京極中納言仮名遣』・写本

以上、二十七本の調査済『下官集』伝本の内、8と22の二本は模刻本、二十五本は写本である。

尚、二十五本の写本の内的一本、京都大学文学部国語学国文学研究室蔵「『定家卿書式』模本」は大正五年(一九一六)に、当時、橋本進吉氏所蔵であった「定家卿書式 三藐院殿臨書」(現在の国文研本『定家卿

書式』を双鉤填墨<sup>(9)</sup>、あるいは双鉤廓填と呼ばれる複製法で作成した写本である。したがって、その書風も「定家様」である。ただし、それ以外の二十四本の写本は自運であるため、「定家様」では無い。

二本の模刻本は、定家自筆『下官集』の、「江戸初期の三筆」と称される能書・三藐院近衛信尹による臨書「三藐院関白臨定家卿書」を底本として、江戸後期の名彫師・井上慶寿が鐫した版下から興された拓印（正面摺り・陰刻）<sup>(10)</sup>の同一の法帖である。（参照・資料① 国文研本『定家卿書式』影印、及び、「二・『下官集』模刻本「三藐院関白臨定家卿書」I 国文研本『定家卿書式』全文翻刻）

なお、現在、定家の書風は「定家様」と称されている。この名称は、江戸中期の国学者・山岡浚明（安永九年・一七八〇・五十五歳没）が、宝暦五年（一七五五）ごろ起稿し、極く晩年まで加筆し続稿した<sup>(11)</sup>と言う『類聚名物考』の中の「定家様」に基づいている。名児耶氏は、この山岡浚明の「定家様」に注目し、五島美術館「特別展『定家様』（一九八七年）の開催に当り「読みをつけて、定てい家か様よう」としました。ただし基本的には、その時点まで定家様は定家流とイコールだということです<sup>(12)</sup>と述べ、用いている。

そして、名児耶氏は、この「定家様（ていかよう）」の意義について、「基本的には狭い範囲で言う定家流。もつと狭く言えば定家自身にきわめて近い筆跡ということになります。そこはもうちょっと超えて——中略——『定家流』に同じ。藤原定家以外に継承された定家の特色ある筆致」あたりでもいいとおもいます。」<sup>(13)</sup>と述べる。

更に、その書風の特徴については「一字一字の文字の線の太い細いはつきりしている。それから何といっても連綿がないですね。——中略——それは少し字を扁平にしますので、もともと連綿が少ないのです。——中略——そういう結果、当然わかりやすい字だということも言えます。」<sup>(14)</sup>と、述べる。この特徴は、後述する、石川氏が述べる「筆記の書」<sup>(15)</sup>

を裏付けるものであろう。

また、二〇〇九年刊の『冷泉家・蔵番物語「和歌の家」千年をひもとく』の中で、冷泉為人氏は「定家の筆跡に似せた書体は『定家様』とよばれる——中略——冷泉家において、この定家様が登場するのは応仁の乱（一四六七—七七）後の、七代為和の時からである。——中略——為和以後、江戸時代を通じて冷泉家代々の当主は定家様を踏襲する。その頃から定家様が冷泉家の筆様として『ハレ』（表向き）の書体となっている」<sup>(16)</sup>と、述べる。すなわち、冷泉家では「定家の筆跡に似せた書体」を「定家様」と呼んでいるのである。

尚、冷泉家および名児耶氏による「定家様」等と区別する為、本稿では、定家自身の書いた定家様の書風を、手書「定家様」と記す。尚、「手書」については、堀江知彦氏が「手ずから書くこと。またその自筆の書きものをいう」<sup>(17)</sup>と述べられている。「自筆」あるいは「真筆」とせず、「手書」としたのは、「自筆」は自らの編著を自らが書写した場合のみ、「真筆」には他者の編著を書写した場合という区別があるという、久保木秀夫氏の御教示を参考とした。

古来、「定家様」、或は「定家流」として尊重されてきた定家独自の書風が、年齢により変化していたことについては一般的に知られていなかった。しかし、定家の書風の変化については、既に、飯島春敬氏が注目し、現在では、名児耶明氏及び島谷弘幸氏らにより立証され、系統立てても行われている。飯島氏は、「筆者の一生を通じて線とか好みのかという個性的なものは、あまり動くことのない場合が多い」<sup>(18)</sup>と言う。したがって、手書「定家様」の書風は、自らの意志により変化させられたと言う稀な例の一つであり、定家自筆『下官集』執筆時期推定の手掛りとなりうるものであろう。

この定家の書風の変化は、突然に生じたものではない。後述するように、数多く残されている定家の自筆および真筆の内、たとえば、一般社

団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵「歌合切」(参照・資料⑨)等に見られる定家若年の院政期風の書を、定家自らの意志で、年月を掛けて変化させた、一目で手書「定家様」の書風と解る作品の一つが、定家五十五歳「建保四年三月十八日書之」の奥書がある、定家自筆『拾遺愚草』である。稿者は、この定家の書風の変化に着目した。

前述してきたように、定家自筆『下官集』のみならず、その臨書「三藐院関白臨定家卿書」の存在も未詳であるが、先行研究においては本文の優秀性のみならず、手書「定家様」の書風で記されていることを根拠の一つとして、大東急本『定家卿模本』は、『下官集』研究の最善本と位置付けられてきた。

しかし、この大東急本『定家卿模本』には欠落部分がある。そのため、浅田(二〇〇〇)の全文翻刻は、京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『定家卿書式』模本・写本に依る補写が為され、東京大学国語研究室蔵「九条家旧蔵本『詠歌大概 下官集』」・写本、及び、ノートルダム清心女子大学付属図書館「黒川文庫蔵『和歌玉屑抄』」・写本による校合も行われている。

又、大東急本『定家卿模本』全体の状態について言えば、読解しにくい箇所が数多く見られる。これは、浅田氏が述べるように、「墨をたっぷり付け過ぎたためか、版本から紙を剝す際に表面が剝がれ残ってしまい、白く空白になってしまった箇所がある」<sup>(19)</sup>、ことに依るのであろう。

その一方、同一の版本から興された国文研本『定家卿書式』は、大東急本『定家卿模本』よりも空白になってしまった箇所も少なく、「全体に墨の付きがいくぶん薄く、大東急本より読み易くなっている」<sup>(20)</sup>、すなわち、より良好な状態である。

なお、本文以外で、国文研本『定家卿書式』には第九紙が存在するが、大東急本『定家卿模本』では欠落しており、そのため後掲する四つの奥書の内、第三番めの奥書(極書)の最後の行「享禄元年後九月廿八日老

納逍遙子誌」および第四番目の奥書(書写奥書)の全文「此一巻堀尾出雲守所持也閑／覧多幸之余令書寫了／慶長八年卯月廿五日 信尹」、そして、刊記「井上慶壽鐫」が欠落している。(参照・資料①第九紙)即ち、この模刻本の由来を裏付ける三藐院近衛信尹が定家自筆本を書写した記事及び、これを鐫した職人名という重要な情報が失われているのである。また、国文研本『定家卿書式』のみ、第三紙および第五紙の末尾に、それぞれ、三、五、の数字が記されているが、大東急本『定家卿模本』には見られない。この数字の存在は、この二本の模刻本『下官集』が法帖として作成されたことを示すものである。同一の版本から興されたとは言え、国文研本『定家卿書式』の方が、欠落等が少なく、状態も良好である。したがって、国文研本『定家卿書式』を善本とし、『下官集』伝本の研究を進める。

尚、後述するように、国文研本『定家卿書式』奥書群のうち、「奥書1」〔奥書2〕〔奥書3〕の注記には、奥書群が、定家自筆『下官集』末尾に書き入れられていたのではなく、それぞれ別紙に書され、添えられていたことに言及している。これは冊子本では考えにくい。従がって、定家自筆『下官集』は、卷子装であったと思われる。

## 二.『下官集』模刻本「三藐院関白臨定家卿書」

### 1 国文研本『定家卿書式』全文翻刻

先行研究に於いて、『下官集』伝本の影印および翻刻が、共に公刊されている例は非常に少ない。寡聞ではあるが、稿者が調査済の伝本では、浅田氏の一連の『下官集』研究に於ける、大東急本『定家卿模本』のみである。浅田(二〇〇〇)では全文翻刻、浅田(二〇〇三)では全文の影印が掲載され、現在、『下官集』研究の重要な基盤となっている。

一方、国文研本『定家卿書式』は、二〇一一年、『国文学研究資料館報』第五七号「新収資料紹介」に「定家自筆本の風姿を伝える模刻版本『定

家卿書式（三藐院殿臨）』と題された浅田氏の紹介文では、影印の一部のみの掲載である。

本稿では、国文研本『定家卿書式』全文の影印（参照・資料①）を掲載するとともに、翻刻を再掲し、「Ⅲ 国文研本『定家卿書式』奥書群および刊記」では、奥書群の読み下し文を、掲載する。

尚、比較の為、大東急本『定家卿模本』の欠落箇所を傍線で示す。大

### 翻刻・国文研本『定家卿書式』<sup>(21)</sup>

三藐院関白臨定家卿書（細字）

（表紙裏書）

僻案 人不用又不可用  
事也

此事此廿余年以来之人

殊有存旨歟悉被書改

大略皆えと書てへとゑと

被棄歟と見ほとにふゑ

絶たへ許二此字出来

言語にも美□女房達は

月次のえみむ 五体不具  
えあん

なりと

（頭註） 一書始草子事

如狭衣 仮名物多置右枚自左枚書始之

物語ハ 旧女房所書置皆如此先人又

用之清輔朝臣又用之或自右枚端

必自左 書之伊房卿如此下官付此説模

東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』に、共に存在する欠落は□で示し、読解不可能の文字は■で示す。又、『下官集』五条の内、「一 嫌文字事」の条に、書写の際に間違い易い「かな（女手）」遣いの基準例を示す箇所がある。その例となる「かな（女手）」のみ、網掛けをし、その下方に、それぞれの字母を記した。

□（欠落↓麗（東京大学国語研究室蔵

『詠歌大概 下官集』写本参照。）

〈第一紙〉

枚書  
流例歟漢字之摺本之草子右一枚白紙  
徒然似無其詮之故也

## 一 嫌文字事

他人惣不然又先達強無此事只愚  
意分別之極僻事也親疎老少一  
人無同心之人尤可謂道理況亦  
当世之人所書文字之狼籍過于  
古人之所用來心中恨之

緒之音 **を**

ちりぬるを書之  
仍欲用之

**を**みなへし **を**とは山 **を**くら山

たまの**を** **を**さ、 **を**たえのは□

をくつゆ てに**を**はの詞の**を**の字

尾之音 **お** うゐの奥山書之故也

おく山 おほかた おもふ おしむ

おとろく おきのは おのへのまつ

花をおる 時おりふし

**え** 枝 **え** むめかえ まつかえ たちえ 江

笛ふえ 断たえ 消きえ 越こえ きこえ

見え 風さえて かえての木 えやはいふきの

へ うへのきぬ 不堪 たへす 通用常事也 しろたへ

(頭註)  
近代之人  
多  
ふゑとかく  
古人所詠哥  
あしまよふ  
江を

以之可為証

草木をうへ**を**く裁也 としをへて  
まへうしろ ことのゆへ 栢 かへ

□ (欠落) ↓し (東京大学

国語研究室蔵『詠歌大  
概下官集』写本参照。)

\***を**の字母・遠

\***お**の字母・於

\***え**の字母・衣

\***きこえ**の**え**の字母・江

\***へ**の字母・ㇰ

三  
〈第三紙〉

〈第二紙〉

やへさくらけふこのへに さなへ  
すゑ ゆくゑ こゑ こすゑ

\*ゑの字母・恵

絵 衛士 ゑのこ 詠 朗詠 産穢  
垣下座 ゑんかのさ ものゑんし 怨

ひ こひ おもひ かひもなく いひしらぬ

\*ひの字母・比

あひ見ぬ まひ、と うひこと

いさよひの月 但此字哥之秀句之時皆通用

ゐ 藍あゐ つゐに 迷にいろにそ  
いてぬへき 池のいゐ

\*ゐの字母・為

よゐのま よひ又常事也  
通用也 おひぬれは おひぬれは  
又常事也

\*いの字母・以

いにしのたい 鏡たい 天かい

〈第四紙〉

右事ハ非師説只発自愚意見  
旧草子了見之

一 仮名字 かきつゝくる事

としのう ちには るはきにけり  
と、せをこ そとやい はむことし

如此書時 よみときかたし 句を

かきゝる大切 よみやすきゆへ也

としのうちに はるはきにけり ひと、せを

こそとやいはむ ことしとやいはむ 仮令如此書

一 書哥事

知物様之人称故実態以上句之末

下句之行之上に書

さくらちるこのしたかせは さむか  
らてそらにしられぬゆきそふりける

五

〈第五紙〉

如此書雖有其說當時至愚之性迷而不弁上下句只付読安可用左説

さくらちるこのした風はさむからてそらにしらぬゆきそふりける

真名を書交字或ハ落字之時

上句一行にたらすなれとも只如闕字其所を置て次の行に可書下句之由洪之

一 草子付色々<sup>シルシ</sup>符事 和漢有之  
仮令

古今和哥集卷第二

如此之所也

左枚書始其事時多付件枚  
清輔朝臣如此付

〈第六紙〉

先人左枚雖書之付不書右枚  
下官用之 以右手引披依有便也  
已上先人下官存之他人不同心

（奥書1）

二条中将為衡朝臣筆（細字）

未被及御覽候歟之由存候 ■（細字）

定家卿筆作候故進上仕候

相構々可有御隱密候哉比興<sup>本ノマ、</sup>々々

此紙者コハ杉原歟（細字）

■ ■（読解不可能）

〈第七紙〉

〔奥書2〕

定家卿真跡也 為衡朝臣進  
養徳院予伝領之可秘

花押

此紙者ウチクモリ（細字）

〔奥書3〕

是ハ即鳥子也（細字）

右奥書判形雖不知之実相院准后義運  
大僧正歟筆跡相似者也彼准后者養徳院

贈左相府 鹿苑院殿御舍弟權大納言  
満詮号小川殿 子息也相伝有其

由歟為衡朝臣者二条家正流為遠卿子也  
家之文書悉相伝之仁所進養徳院無疑者

乎尤可秘藏者也

〈第八紙〉

享祿元年後九月廿八日老衲逍遙子誌

〔書写奥書〕

此一巻堀尾出雲守所持也閑

覽多幸之余令書写了

慶長八年卯月廿五日 信尹

井上慶壽鐫（細字）

〈第九紙〉

## Ⅱ 国文研本『定家卿書式』本文

国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の本文では、『下官集』五条の前に、「僻案」と題された表紙裏書が存在する。

「僻案」が記されている位置は一定とは言えず、『下官集』本文の前に存在する伝本は、二本の模刻本とその転写本の他に、天理大学附属天理図書館蔵「僻案」・写本(奥書によれば、藤原為家筆本を、冷泉為満(二五五九―一六一九)が書写)のみである。『下官集』本文末尾に「僻案」が「袖書云」として存在する伝本としては、東京大学国語研究室蔵「九条家旧蔵本『詠歌大概 下官集』」がある。又、二種連写本と呼ばれ、二本の『下官集』が前後に並ぶと言う特殊な形態を持つ伝本の一つ、静嘉堂文庫蔵『下官集』では、後に位置する『下官集』の末尾に「僻案」が「表紙裏書云」として、記載されている。「僻案」の位置は多様である。また、国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』には、「一書始草子事」の条、および「一嫌文字事」の条の「え」の項の上、それぞれに、細字の手書「定家様」で頭注が記されているが、この頭注も、調査済伝本の全てに存在するものではない。

なお、模刻本である国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』本文の冒頭には、明らかに定家とは別筆の細字で「三藐院関白臨定家卿書」と記されている。この別筆の細字は国文研本『定家卿書式』のみに存在する。巻末の刊記「井上慶寿鐫」と同筆である。

模刻本の「僻案」および『下官集』五条の紹介、そして、内容の検討については、浅田(二〇〇〇)及び、浅田(二〇〇一)に、大東急本『定家卿模本』を底本として、詳しく述べられている。したがって、本稿では「僻案」及び『下官集』五条の内容については、国文研本『定家卿書式』を底本とし、簡略に記す。

「僻案」すなわち、『下官集』五条の前に位置する表紙裏書には、「此廿余年以来」の「え・へ・ゑ」の仮名遣の乱れについて述べられている。

『下官集』本文末に執筆年月日の記載が無いため年代の特定は出来ないが、定家は、人々が「エ」の音節を「え」と表記し、「へ」「ゑ」を用いなくなったこと、また、口語でも「エ」と発音すべきところを「エ」と発音している、と述べている。

## 「一 書始草子事」の条

この条は、草子(冊子本)の書記作法、即ち、見開きの何方の頁から書き始めるかについて言及し、漢字の摺本すなわち「当時日本にもたらされていた宋版本」<sup>22)</sup>に倣い、右頁の端から書くことを採用し、そして、右頁の一枚を空白にしておくのは無駄であり意味がない、という見解を述べている。

## 「一 嫌文字事」の条

定家自身の発案なので「他人惣不然」、すなわち、「他人は仮名を使い分けることを行っていない」と記し、同音語における「を」「お」の使用区分を始めとする、後世、「定家仮名遣」と称される用例を示す。

## 「一 仮名字かきつゝくる事」の条

和歌三十一文字、五・七・五・七・七の句毎の切れ目を無視した連綿を「よみときかたし」と批判し、句を一つの単位として仮名字を区切ることを、「よみやすきゆへ也」と述べ、和歌書記の基準例を示す。

## 「一 書哥事」の条

この条は冊子に和歌を二行に書く要領である。物の様を知る人が「故実」と稱して、態と上句の末尾を二行目の下句の上に送って書く「よみときかたし」例に対し、和歌を上句・下句に二分して書く「よみやすきゆへ也」という、規準例を示す。

さくらちるこのした風はさむからて

そらにしられぬゆきそふりける

なお、この定家が批判する「故実」に相当する和歌書記は、調度手本と称される、平安時代後期の写本に、数多く見られる<sup>23)</sup>。

「一 草子付色々符事 和漢有之」の条

「草子付色々符事 和漢有之」とは、目指す場所を開き易くするために、「草子に色々の付箋をつけること。これは和書でも漢籍でも行われること」<sup>(24)</sup>の意、である。

「冷泉家 王朝の和歌守展」(二〇〇九年)で展示された、藤原定家等筆『散木奇歌集』(安貞二年・一二二八写)を始めとする和歌集に、「色々符」すなわち、料紙等の小片が貼られているのを確認した。しかし、「漢」の付箋の資料は未見である。

以上、『下官集』五条の内容から言えば、定家自筆『下官集』の執筆意図は、和歌を「かな(女手)」のみならず、漢字をも用いて書記する際の誤写および誤読を避けることを目的とした「よみやすきゆへ也」、

#### 〔奥書1 (本奥書)〕

二条中将為衡朝臣の筆。(細字)

未だ御覧に及ばれず候ふかの由、存じ候ふ。 ■

定家卿の筆作に候ふ故、進上仕り候ふ。

相構へて御隠密有るべく候ふか。比興々々。<sup>本マ、</sup>

此紙はコハ杉原か。(細字)

#### 〔奥書2 (伝領奥書)〕

定家卿の真跡なり。為衡朝臣養徳院に進らす。

予之を伝領す。秘すべし。

此紙はウチクモリ。(細字)

花押

#### 〔奥書3 (極書)〕

是ハ即ち鳥子なり。(細字)

更に「使い易き」をも念頭に置いた和歌書記の作法書であり、また冊子本作製のための実用的な指導書でもあると考えられる。『下官集』が「マニユアル的学書」<sup>(25)</sup>と、謂われるのも頷ける。

### Ⅲ 国文研本『定家卿書式』奥書群および刊記

前述したように、国文研本『定家卿書式』本文には、定家自筆であることを示す定家の署名および、書写年月日は見られない。しかし、この『下官集』本文が、定家自筆本であること、および、その来歴を示すのが、本文に続く奥書群である。尚、奥書群の内、「奥書1―3」の内容は『下官集』伝来に関する識語、そして、「奥書4」は書写奥書である。以下、原本の読み下し文を示す。

■細字・読解不可(亭感?)

右奥書の判形之を知らずと雖も実相院准后義運

大僧正か。筆跡相似る者なり。彼の准后は養徳院

贈左相府 〔割注〕鹿苑院殿御舍弟權大納言満詮号小川殿の子息なり。相伝其の由有るか。

為衡朝臣は二条家正流為遠卿の子なり。

家の文書悉く相伝の仁。養徳院に進らす所、疑ひ無き者か。

尤も秘藏すべき者なり。

享祿元年後九月廿八日老柄逍遥子誌す。

〔奥書4 (書写奥書)〕

此一卷堀尾出雲守所持なり。

閑覧多幸の余り書写せしめ了んぬ。

慶長八年卯月廿五日 信尹

井上慶寿鐫(細字)

〔奥書1〕の冒頭には、奥書本文に比べると細字で書された、注記「二

条中将為衡朝臣筆」が見られる。この注記に記された人物は、逍遥子(三

条西実隆)の記した〔奥書3 (極書)〕によれば、御子左家嫡流の二条

為遠(一三四二―一三八一)の子・為衡である。そして、〔奥書1〕の

内容は、二条為衡が貴重な伝書、即ち定家自筆『下官集』を、足利三代

將軍義満(一三五八―一四〇八)の弟・養徳院(足利満詮・応永二五年

(一四一九)没)に進上したことを示す。そして、二条為衡が定家自筆『下

官集』を所持していたということは、その伝書の由緒の正しさを裏付け

るものである。尚、二条為衡の生没年は不明であるが、応永十六年

(一四〇九)の内裏歌会に登場している。しかし、その後の消息は解ら

ない<sup>(26)</sup>と言う。

〔奥書2〕は、〔奥書3〕によれば、養徳院の子・実相院准后義運大僧

正の伝領奥書と考えられる。義運は満詮の子であるから、伝領は不自然

ではない。

〔奥書3〕は、逍遥子、即ち、歌人・学者として知られる三条西実隆

(一四五五―一五三七)が、〔奥書1〕および、〔奥書2〕の内容を保証

する、極書である。この定家自筆『下官集』を三条西実隆が所持してい

た可能性も考えられる。

以上、〔奥書1〕―〔奥書3〕の奥書群が伝えるように、御子左家嫡

流の二条家に代々伝えられてきた貴重な伝書、すなわち、定家自筆『下

官集』は、二条為衡の時代に流出し、それが足利満詮、そして、その子・

義運の所有するところとなったのである。

〔奥書4 (書写奥書)〕によると、義運所蔵後、定家自筆『下官集』は、

自筆『下官集』を閲覧し、書写したことが述べられている。これは、この時点に於ける、定家自筆『下官集』の存在を裏付けるものであるが、これ以降、その所在は未詳である。

そして、〔奥書4（書写奥書）〕の後に細字で記されている刊記「井上慶壽鐫」は、後述するように、近衛信尹による定家自筆『下官集』の臨書が江戸後期に伝存し、それを、名彫師・井上慶壽が鐫したことを裏付けている。井上慶壽については、「五」「三藐院関白臨定家卿書」と名彫師・井上慶壽」で後述する。

なお、近衛信尹が臨写した定家自筆『下官集』を、浅田氏は、「信尹模写本」〔浅田（二〇〇三）八頁〕と記されている。この「模写」とは、「どのような方法で書写するかによって、（1）透写、（2）臨写、（3）双鉤填墨の三種に分けられる」<sup>27）</sup>と言う複製方法の総称である。

更に、「近衛信尹筆『定家熊野懷紙』写 一葉」〔近衛家熙『予楽院模写手鑑所収』陽明文庫蔵（参照・資料②）等、が示すように、近衛信尹は臨書の名手でもある。したがって、「（2）臨写」、即ち「親本を横においてよく見ながら原本通りに真似て書き写す方法」<sup>28）</sup>が相応しいと思う。その為、本稿では、信尹臨写本、と記す。

ただし、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の『下官集』本文は、臨写であるが、奥書群は当然のこととはいえ、近衛信尹による、定家の書の倣書である。

所謂「定家様」で書されている〔奥書1〕～〔奥書4〕は、書風から見て、近衛信尹の倣書である。この奥書群の倣書の特徴は、丁寧な筆致で臨写された『下官集』本文と比較すると、やや筆勢が強いことである。後述するが、近衛信尹の書の特徴は筆勢の見事さにある。その筆勢が、これら倣書にも滲みでたのだと思われる。尚、〔奥書3〕の逍遙子による極書の書風と、逍遙子（三条西実隆）自筆の書<sup>29）</sup>、とを比較した

ただし、『下官集』〔奥書4〕の末尾に記されている「慶長八年卯月廿五日 信尹」の、「信尹」と記された署名は、倣書ではなく、近衛信尹の自運すなわち自筆の書である（参照・資料①第九紙）。

尚、この署名が、信尹自運である裏付けとして、以下の例を挙げる。

『近衛信尹筆和歌懷紙』（慶長七年（一六〇二）「当会初」陽明文庫蔵、（参照・資料③））に「信尹」の署名が見られる。この署名には、前田多美子氏が述べるように、「正面を向いた左右対称の形ではない。それなのに不思議にバランスがとれているのである。躍動する均衡というべきか」<sup>30）</sup>、即ち、『下官集』〔奥書4〕の、やや右側に傾いて記されている「信尹」の署名と同様の特徴が見られる。但し『下官集』の署名の方が、尊崇する定家の自筆本の臨写、即ち「晴れ」の書である為か、整った字形である。

さらに、『日本書蹟大鑑』所収「57 短冊」と題された短冊<sup>31）</sup>の「立春」、そして、前述した、近衛信尹筆『定家熊野懷紙』写 一葉（近衛家熙『予楽院模写手鑑』所収 陽明文庫蔵<sup>32）</sup>（参照・資料②）の左端にある書入れに見られる「信尹」の署名等にも、また、前田氏が述べる特色が見られる。これら署名の書風の類似も、又、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の親本が、信尹臨写本であることを示すものである。

尚、能書・近衛信尹については、「四」藤原定家自筆『下官集』と能書・近衛信尹」で後述する。

また、定家自筆『下官集』本文の紙についての記載がないが、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』奥書群の内、〔奥書1〕（奥書2）〔奥書3〕それぞれに、細字で記された、紙に関する注記が見られる（参照・資料①第七～八紙）。

〔奥書1〕の文末の注記に見られる「此紙者コハ杉原歟」の「コハ杉原」は、「杉原紙の一種で、より堅くて厚く、主として加賀（石川県）に産し、

強紙ともよばれ、中世の文献には数多く見られる<sup>(33)</sup>と言う、即ち、主として中世に使用された紙である。そして、『奥書2』文末の注記「此紙ウチクモリ」の「ウチクモリ」は、「うちくもがみ」とも呼ばれ消息の料紙のほか、色紙・短冊・懷紙・表紙などに用いられ、長年にわたって愛好された紙、そして『奥書3』の前に記されている注記「是ハ即鳥子也」の「鳥子」は、「雁皮より製するところの紙であり、鳥子なる名称は中世に至って初めてあらわるる」<sup>(34)</sup>、と呼ばれる紙である。

これら奥書群の注記に記されているように、『奥書1』「コハ杉原」、『奥書2』「ウチクモリ」、『奥書3』「鳥子」と、それぞれ、使用されている紙の種類が異なっていることに、言及している。従がって、この紙に関する注記は、奥書群が、定家自筆『下官集』末尾の余白に書き入れられていたのではなく、それぞれ、別紙に書かれ、添えられていたことを示す。この注記も、書風および筆勢から見て、近衛信尹の倣書であろう。

以上、述べてきたように、近衛信尹は、尊崇する定家自筆『下官集』の本文を臨写、そして奥書は倣書、更に奥書を記した紙の質に至るまで、丁寧に記録している。これは、貴重な定家の書のみならず、その来歴をも正確に残そうとした信尹の、定家への畏敬の念の表われであると思われる。

### 三. 法帖「三藐院関白臨定家卿書 一帖」

前述したように、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』本文の前には、この模刻本の由来を示す表題、すなわち、「三藐院関白臨定家卿書」が、本文とは別筆で記されている(参照・資料①第一紙)。

更に、奥書群の後に記された刊記は、江戸後期の名彫師・井上慶寿が鐫したことを示している(参照・資料①第九紙)。尚、表題「三藐院関白臨定家卿書」と刊記の書風を比較した結果、同筆であり、「五.『三藐院関白臨定家卿書』と名彫師・井上慶寿」で後述するように、「『集古法帖』

井上清風跋」(内閣文庫蔵)に、「井上慶寿拝記」と、記されている書風と一致する。

この「三藐院関白臨定家卿書」の表題を持つ、模刻本・大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の存在、そして、その内容を裏付けるのが、浅田氏が『かがみ』第三六号、二〇〇三年で紹介されている、江戸後期に出版された大阪の国学者・尾崎雅嘉(一七五五～一八二七)著『群書一覽 二』、法帖部「三藐院関白臨定家卿書 一帖」(享和二、一八〇二刊)の記述である。

ここに述べられている、「寛政中江都井ノ上慶寿蔵刻にして定家卿自筆のかなづかひの巻を近衛関白信尹公の臨書したまへるもの也」は、寛政年間(一七八九～一八〇二)に近衛信尹が臨書(臨写)した定家自筆『下官集』、即ち、信尹臨写本が存在していたこと、および「井ノ上慶寿蔵刻にして」は、井上慶寿が信尹臨写本を刻した版木を所蔵し、これを「三藐院関白臨定家卿書 一帖」として、刊行したことを、示している。

この『群書一覽』の記述について、浅田氏が、「寛政は享和の一つ前の元号(一七八九～一八〇〇)だから、『群書一覽』刊行に近接した時期のことであり、信頼できる情報と思う」(浅田(二〇〇三)二頁)と、述べられているのは、妥当である。

又、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の『下官集』本文は、「一 書始草子事」、「一 嫌文字事」、「一 仮名字かきつゝくる事」、「一 書哥事」、「一 草子付色々符事 和漢有之」の、五条構成である。『群書一覽』では、「巻首に 書始草子事 次に嫌文字ノ事あり」と記しているのは、これと一致し、「巻末に二条中将為衡朝臣 実相院准后義運大僧正 逍遙院実隆公の奥書有」という、奥書群に関する記述の内容も一致する。更に、国文研本『定家卿書式』(完本)にのみ見られる書写奥書について、「又三藐院殿奥書に曰 此の一巻堀尾出雲守所持也 関覧多幸之余令書写畢又 信尹」と、定家自筆『下官集』を、近衛

信尹が臨写した内容も一致している。

尚、稿を改めて述べるが、『群書一覽 二』法帖部「三藐院関白臨定家卿書 一帖」の文末では、行阿著『假名文字遣』<sup>(35)</sup>の序文を踏まえ、「接ずるに行阿のかなつかひハ親行の手より出て定家卿合点の書也」と述べた上で、「此一巻は実に定家卿が筆のかなづかひなるものなるべし」と、「三藐院関白臨定家卿書 一帖」を、定家自筆の「かなづかひ」の書と認識している。既にこの時代、一般的に、又、尾崎雅嘉自身も、『下官集』を「定家仮名遣」と認識していたことを表すものであろう。

なお、『群書一覽』の刊行後、法帖「三藐院関白臨定家卿書 一帖」の底本、即ち信尹臨写本の行方については、定家自筆『下官集』と同様、現在に至っても不明である。したがって、法帖とは言え、『下官集』伝本中、唯一、手書「定家様」の書風をも伝える、国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の二本の模刻本は、『下官集』研究を進めるに際して、非常に重要な資料である。

#### 四・藤原定家自筆『下官集』と能書・近衛信尹

前述したように、藤原定家自筆『下官集』を臨写したのは能書・三藐院近衛信尹（一五六五～一六一四）である。近衛信尹は、当時の公家社会に於いて広く用いられていた、尊円親王（一二九八～一三五六）を初祖とする青蓮院流の書を学び、育った。青蓮院流は、青蓮院門主・尊円法親王が「当時の世尊寺流の筆法にあきたらず、上代の道風、佐理、行成の書法を参酌して新たに一家の法を立て、豊麗円勁な書風」<sup>(36)</sup>である。その尊円法親王の消息の影印<sup>(37)</sup>等に見られる、豊かで流麗な、しかも芯の通った書風である。この書風と比較すると、定家自身が自ら評して「鬼の如し」<sup>(38)</sup>と言う書風に、信尹は、歌人および歌学者としての藤原定家を尊崇するのみならず、傾倒したと言う。

また、国文研本『定家卿書式』書写奥書（奥書4）では、「堀尾出雲

守所持」の定家自筆『下官集』を如何なる経緯で披見したかについては述べられていない。しかし、「此一巻」即ち、定家自筆『下官集』を「閑覧多幸の余り書写せしめ了んぬ」と記され、その文意は、近衛信尹の尊崇する定家の書を閑覧し、臨写した喜びを窺わせるものである。

近衛信尹は、定家自筆『下官集』を臨写した際、定家独自の書風を見事に再現している。これは、信尹臨写本を親本とする、法帖「三藐院関白臨定家卿書 一帖」すなわち、東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』本文の書体（書風）が、正しく所謂「定家様」であることにより判断できる。したがって、前述したように、大野晋らが、この書風および『下官集』五条の内容の優秀性を根拠として、大東急本『定家卿模本』を『下官集』研究の最善本と位置付けたことも、能書・近衛信尹に負うところが多い、と言える。

近衛信尹は青蓮院流を、信基（一五七七～一五八二）、信輔（一五八二～一五九九）と名乗っていた若年期に学び、既に天性の能書としての才を発揮していた。しかし、慶長四年（一五九九）信尹と改名した頃から尊崇する定家の書を学び、これを自家葉籠中のものとして、信尹独自の近衛流、或は三藐院流とも称される書風を確立し、本阿弥光悦、滝本坊昭乗（松花堂）と共に、「江戸初期の三筆」と讃えられた。

その近衛信尹の書の特徴は筆勢の見事さにある。信尹の父・近衛前久（一五三六～一六二二）は、信尹宛の書簡で「只今御筆勢別而見事候」<sup>(39)</sup>と称讃している。筆勢、すなわち、筆力について、尊円親王（一二九八～一三五六）の書論『入木抄』『筆仕肝要』の項では、「字かたちは、人のようばう、筆勢は人の心操、行跡にて候」<sup>(40)</sup>と述べられている。即ち、近衛前久は、信尹の書に、最高の賛辞を呈したのである。

尚、尊崇する定家の自筆『下官集』を臨写するに際し、「晴れ」の書である為と思われるが、『下官集』五条に見られる運筆は丁寧であり、信尹の見事な筆勢は控えられているようである。しかし、倣書で書され

た奥書群の書風は、書した際の速度が早い、すなわち、信尹本来の筆勢が現れているように見受けられる。

また、薩摩配流中(一五九四―一五九六)は「信尹は定家の懷紙を写して過した」<sup>(41)</sup>と言う。そして、帰洛後に書した、近衛信尹筆『詠草』(陽明文庫蔵)<sup>(42)</sup>、(参照・資料④)は「明らかに定家様を意識しながら書いた」<sup>(43)</sup>書である。但し、筆勢は信尹自身のものである。なお、この書は、慶長八年(一六〇三)七月に没した、信尹の連歌の師匠筋に当る、里村昌叱宛の贈答の詠草である。したがって、手書「定家様」の書風は、定家自筆『下官集』を臨写した慶長八年には、すでに、信尹の自家薬籠中のものとなっていた、と考えられる。

前田多美子氏によれば、前述の、近衛信尹筆 定家『熊野懷紙』写一葉(『予楽院模写手鑑』所収、陽明文庫蔵<sup>(44)</sup>(参照・資料②)、即ち、定家が建仁元年(一二〇一)、後鳥羽上皇の熊野詣に随行した際、滝尻王子の歌会で「峯月照松」「浜月似雪」の二つの歌題を詠んだ『熊野懷紙』を信尹が写した臨書について、「懷の広い独特の造形法など、定家と信尹の間には随所に共通性があることがわかる」<sup>(45)</sup>、と述べる。また、同じ熊野詣の際、藤代王子の歌会で詠んだ歌題「深山紅葉」「海邊冬月」を記した、藤原定家筆『熊野懷紙』と比較しても、確かに、共通性が見られる。この定家と信尹の間の共通性こそが、信尹に、見事な定家自筆『下官集』本文の臨書および、奥書群の倣書を可能とさせた要因の一つであろう。

又、「近衛家陽明文庫 王朝和歌文化一千年の伝承」展(国文学研究資料館・二〇一一)に展示された、信尹最晩年の慶長十九年(一六一四)「66 詠草(立待月・渡月・月前松・寄月旅) 近衛信尹筆 江戸時代」(参照・資料⑤)の書は、前述の、近衛信尹筆 詠草(陽明文庫蔵)より、線が細めとは言え、「定家様」を意識した書であり、その第一画が長い「月」は、国文研本『定家卿書式』書写奥書(倣書)に見られる「月」と同じ

書きぶりである。そして、和歌が上句・下句に分けて書され、更に「立待月」の上句以外では、句を跨いで連綿が見られないのも、『下官集』「一書哥事」及び「一 仮名字かきつゝくる事」の条の内容に合致する。定家自筆『下官集』の書風のみならず、『下官集』五条の内容の影響をも窺わせる。

更に、信尹は定家自筆『下官集』を臨写した際、『下官集』「一 嫌文字事」の条に定家が自らの間違いを訂正するために印した批正記号をも、忠実に記している。すなわち、「一 嫌文字事」の条「ひ」の例の二行目と三行目の行間を目掛け、「ゐ」の例の二行目の中程から伸びてくる記号が印されているのである。これは、「ゐ」の例として存在する「於ひぬれハ於いぬれは又常事也」を、「ひ」の例に移す様という指示である(参照・資料①第四紙)。

近衛信尹は、藤原定家を偉大な歌人および歌学者としてを尊崇するのみならず、定家の筆跡そのものにも惹かれ、手書「定家様」をも自家薬籠中のものとした。その成果の一つが信尹臨写本であろう。この信尹臨写本を底本として、井上慶寿が鐫した法帖、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』について、浅田氏は「模刻本の印象は確かに定家筆を思わせる書入れなどの生々しさ、本文の優秀性もそれに矛盾しない」<sup>(46)</sup>と、述べている。この手書「定家様」すなわち、定家独自の書風を見事に伝える、二本の模刻本の書風は、『下官集』執筆時期を推定する、重要な手掛りである。

## 五.「三藐院関白臨定家卿書」と名彫師・井上慶寿

先述したように、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の内、国文研本『定家卿書式』奥書群の後に記されている刊記には「井上慶寿鐫」とのみ刻され(参照・資料①第九紙)、そして、尾崎雅嘉著『群書一覽 二』法帖部「三藐院関白臨定家卿書 一帖」には、信尹臨写本

を底本として版下が興され、これを、寛政年間（一七八九～一八〇一）、井上慶寿が鐫したと、述べられている。

井上慶寿については、国立国会図書館デジタル化資料『集古法帖』井上清風跋（内閣文庫蔵）の最後に「井上慶寿拜記」と記され、井上慶寿と井上清風が同一人物であることが示されている。この井上慶寿（清風）の経歴及び事績を辿り、慶寿が鐫した大東急本『定家卿模本』及び国文研本『定家卿書式』の信頼性の裏付けとしたい。

丸山季夫氏は、この名彫師について「井上清風 慶寿、文化七年歿、六十一歳。『永根伍石と集古法帖』（北川博邦氏稿、國學院雑誌73の2）に集古法帖のこと詳し。上毛の人、世々刻師たり。盛名あり。」<sup>(47)</sup>と述べ、版刻の事績として「東江先生草書唐五言絶句二冊。澤田東江筆。卷末に、安永七年八月望、東江源麟、井上清風刻字、御用書物師。江戸日本橋通一丁目出雲寺和泉掾発行」を始めとする、十六点を挙げている。

鈴木淳氏は、寛政五年（一七九三）九月に刻された「王羲之『瘞鶴銘』の跋文中に、「更令慶寿刻之 工之精也果不喪旧觀」<sup>(48)</sup>と慶寿（清風）の刻法が精巧であると称えられていることを紹介し、更に、「江戸後期に活躍した板木師である。賀茂真淵の信頼を得て、明和六年（一七六九）には弱冠二十歳にして『万葉考』三冊の板刻に従事した。その後、安永年間（一七七二～一七八〇）には絶頂期の唐風書家澤田東江の法帖を多く手懸け、さながら東江専属の彫工という観すらあった。」<sup>(49)</sup>と、述べている。

また、鈴木氏は、清水浜臣『泊泊文集』<sup>(50)</sup>の、「古筆古今集墨帖後序文化七年十月」に「此巻ありかたたくみは、いにし頃第五の巻ありたりし藤清風が、今年むそぢに一とせたして又かくものしたるになん」と記されていることに言及し、「文化七年（一八一〇）に六十一歳であった事実は動かない。ただし、丸山氏の記述中、上野の人とするのは誤認であって、正しくは江戸で版木師を世職とする家に生まれたとすべきであ

る。」<sup>(51)</sup>と述べる。

なお、丸山氏が上毛（上野の別名・現在の群馬県）の人とする誤認は、井上慶寿鐫・法帖『安幾破起帖』の呉橋木翹之の跋文に記されている「一日得上毛某家所蔵双鉤」即ち、井上慶寿（清風）が、「上毛某家」に赴き、その某家「所蔵」の「傳小野道風筆『秋萩帖』」模本を双鉤、即ち、その文字の輪郭を写したことの混同と思われる。

更に、鈴木氏は、丸山氏が清風刻として挙げる十六点に、十四点を追加し、「各書目について所蔵、成立年、出版書肆などを記し、年代順に示す」<sup>(52)</sup>として計三十点を挙げ、この書目（書名）を年代順に四期に分け示している。

即ち、第一期は、井上慶寿二十歳の明和六年（一七六九）の賀茂真淵著『万葉考』一点、第二期は、慶寿が澤田東江の法帖を数多く手懸けた、安永七年（一七七二）から安永九年（一七七四）迄の六点、第三期は、井上慶寿の最も脂の乗った時代と言われる、『集古法帖』を始め『安起波幾帖』、『尚古法帖』第十八 行成卿、『権蹟醴泉名残編』（大納言行成卿書）等を含めて鐫した、寛政五年（一七九三）から享和三年（一八〇三）迄の十五点、そして、第四期は、円熟期と言われる、慶寿五十七歳の文化三年から文化八年（一八〇六～一八一）迄の、『久須多末帖』を含む、八点を刻した時期である。

しかし、この鈴木氏の書目分類の第一期から第四期の中には、「三藐院関白臨定家卿書 一帖」に該当する版本は存在しない。国文研本『定家卿書式』に記されている刊記には、「井上慶寿鐫」とのみ記され、私家版である可能性が示されている。すなわち、書肆による出版では無かったが、井上慶寿の事跡としての記録は残されていなかったのであろうか。但し、前述したように、尾崎雅嘉『群書一覽 二』『三藐院関白臨定家卿書 一帖』に、「寛政中江都井ノ上慶寿蔵刻にして定家卿自筆のかなづかひの巻を近衛関白信尹公の臨書したまへるもの也」と、鈴木氏の

分類によれば慶寿の最盛期、すなわち第三期に相当する寛政年間に、信尹臨写本を慶寿が刻したことが記載されている。

管見ではあるが、井上慶寿の事績のうち、第三期に刊行された、『集古法帖』井上清風跋(内閣文庫蔵)、『安起波幾帖』(宮内庁書陵部蔵)、『尚古法帖』第十八 行成卿(国会図書館蔵・他二本)及び、『権蹟醴泉名残篇』(大納言行成卿書) 国会図書館蔵・寛政十二年(一八〇〇)の加藤千蔭跋)そして、第四期の『久須多末帖』(架蔵・文化四年(一八〇七)、を調査した。これら版本は、全て、正面摺の法帖である。

尚、江戸時代の版本は陽刻が主流であるが、法帖の場合、書としての筆勢が殺がれる為、陰刻すなわち、地は墨色そして文字は白抜き(正面摺(拓印))と称される木版印刷法が、「書道の法帖によりふさわしい方法として生かされた。わが国では宝永―享保(一七〇四―一三六)頃、高玄岱や細井広沢などが、中国のそれを模倣して工夫したのに始まる。」<sup>(53)</sup>と、中野三敏氏は述べている。

又、法帖の製作目的は「先人の筆跡を観賞や学書の対象としたもの。」<sup>(54)</sup>と宇野雪村氏は述べる。従がって、原本の内容のみならず、筆跡をも忠実に再現していると考えられる。これを裏付けるために、井上慶寿の最盛期と言われる第三期の事跡中、親本となる法帖と、その原本が、共に存在する例の一つ、『尚古法帖』第十八 行成卿、そして、その原本である、藤原行成(九七二―一〇二七)筆と伝えられている尾州徳川家所蔵(徳川美術館蔵)『伝藤原行成筆 重之集』<sup>(55)</sup>について述べる。

この古筆・『伝藤原行成筆 重之集』について、植村和堂氏は、「行成筆を伝える古筆の中では、時代の下がる方で、本願寺本三十六人集に余程近づいている様に思う」<sup>(56)</sup>と、述べ、飯島氏も「行成筆と伝える古筆類のなかでも、特に優麗にして情趣深いものであるが、行成の真筆、藤原盛時の作とは見られない。」<sup>(57)</sup>と述べている。そして、飯島氏は、「最初は二行書で冬の歌より散らし書となる。線質は優しく弾力があり、速

度も軽く、暗さや重さの美とは対蹠的である。字型は筆が円熟しているためか、そのリズムによって自由につくられた感があり、連綿は数字をもつて一気に構成している。墨継ぎの濃淡が巧みなため立体的な美を表している」<sup>(58)</sup>古筆、と賞賛している。

『尚古法帖』第十八 行成卿、については、同一の版本で刷られたと思われる、次の三本を調査した。

① 『尚古法帖』第十八 行成卿、Y R 11 81 (『源重之百首 尾張徳川侯蔵』・寛政十年十一月藤原茂利題・井上清風鐫) 国会図書館蔵

② 『尚古法帖』第十八 行成卿書、Y 9 9 4 J 9 6 8 0 (大正八年求版・発行、精華堂法帖店) 国会図書館蔵

③ 『尚古法帖』271・3・10 (年号等無し) 多和文庫(香川県)蔵

これら法帖の内、①の国会図書館蔵本は、『尚古法帖』第十八 行成卿と題された本文に続き、寛政十年(一七九八)の年号の見られる跋文、および、「井上清風鐫」と記された刊記があり、また、保存状態も良い。尚、他の二本の法帖は、本文のみである。

その為、①の『尚古法帖』第十八 行成卿、Y R 11 81 (『源重之百首 尾張徳川侯蔵』 国会図書館蔵(参照・資料⑥))と、原本『伝藤原行成筆 重之集』(『重之百首』完本) 徳川美術館蔵、<sup>(59)</sup>の影印(参照・資料⑦)とを、比較した。

前述したように飯島氏は、徳川美術館蔵『伝藤原行成筆 重之集』について、その線質の美を始め、「字型は筆が円熟しているためか、そのリズムによって自由につくられた感があり」等<sup>(60)</sup>と賞賛している。井上慶寿は、原本の線質の美および、リズム感などを表現する為、「書としての筆勢」<sup>(61)</sup>を殺がないと言う陰刻の正面摺(拓印)を駆使し、『尚古法帖』第十八 行成卿の版本を鐫している。

更に、飯島氏は、原本について「墨継ぎの濃淡が巧みなため立体的な美を表している」<sup>(62)</sup>と述べている。この「墨継ぎの濃淡」、即ち、潤筆と渴筆の働きの差異を表現する為に、慶寿は、正面摺（拓印）の特色と言える「地は墨色そして文字は白抜き」<sup>(63)</sup>の「白抜き」を活用している。端的に言えば、潤筆は、深く彫りこんだのではと考えられほど、鮮やかな「白抜き」で、そして、渴筆は、やや浅く彫ったように見受けられる「白抜き」で、線質を表現している。すなわち、慶寿は、正面摺（拓印）の技法を駆使し、原本『伝藤原行成筆 重之集』を、和歌集および書の手本のみならず、観賞の対象ともなりうる法帖として、見事に再現したのである<sup>(64)</sup>。

以上、井上慶寿の経歴および事跡を辿り検討した結果、慶寿が文学および書道に関わる法帖の版本作成を数多く委ねられた、実力のある優れた彫師であることを、確認出来た。これは、井上慶寿が「三藐院関白臨定家卿書」、即ち、信尹臨写本を正確に鐫したことと裏付であると共に、模刻本・国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』を、信頼できる伝本と位置付ける、根拠の一つである。

## 六・藤原定家の書風と定家自筆『下官集』執筆時期

国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の二本の模刻本は、能書・三藐院近衛信尹が臨書し、名彫師・井上慶寿が刻した定家独自の書風、即ち、手書「定家様」を見事に再現している法帖である。この再現された手書「定家様」を手掛りとして、二本の模刻本の執筆時期を推定し、基準伝本と位置付け、藤原定家『下官集』研究を進める基盤としたい。

その手書「定家様」の印象について、飯島氏は、次のように述べている。

書は肉太く重厚でいささか泥臭い感じもするが、素朴な個性味が

あふれている。この人は歌人としても学者としても著名であったから、その書もたいへん尊重されてきた。彼自身は手書きと思つていなかったようである<sup>(65)</sup>、（傍線、引用者。以下同）

言いかえれば、手書「定家様」は、実用に則した気負いの無い書風である。そして、石川九楊氏は、承元三年（一二〇九）、定家が四十八歳の時に成立の歌論書『近代秀歌』定家自筆本<sup>(66)</sup>の書風について、次のように、記している。

この書からは上代様の流麗さが完全に失われ、豊満な外貌とは別に切れのよい律動が見られる。これは、考えながら書き、書きながら考える文字を書きつけるリズムの出現であり、筆記の書として日本の書史上に聳立している。<sup>(67)</sup>

すなわち、石川氏は、筆記のための書風が出現したと指摘している。従がって、この定家独自の書風は、平安時代に見られる「書の美」を追求するものではなく、和歌や歌論等を書す際、自らの意図、思考等を客観的に表現する為の実用的な書風である、と考えられる。なお、平安時代の主流を占める、流麗な美を表現する「かな（女手）」は、連綿を駆使するのみならず、連綿に合うように文字の変形あるいは省略等をしたものが、数多く見られる<sup>(68)</sup>。これが、結果として、誤読および誤写による誤謬を引き起こす要因の一つになり得るとの認識を、定家は有していたのではないであろうか。

手書「定家様」即ち定家独自の書風について、冷泉為人氏は、次のように述べる。

定家の書体は文字の均整を求めずリズムミカルに速く書こうとした

ことから、打ち込みは自然に省略されるようになり、さらに線は太くなったり細くなったりして速書型書風の特徴をよく示している。それは、消息(手紙)、記録、歌集、日記などにおいて、必要に応じて書かれたものである<sup>(69)</sup>。

この定家独自の書風は、平安時代の「書の美」を追求する書風と比べると、たしかに「書は肉太く重厚でいささか泥臭い感じもする」<sup>(70)</sup>、又、線の肥瘦の激しさ等が印象的な書風ではあるが、筆勢および筆圧の変化が齎す線の擦れや微妙な変化等は、あまり見受けられない。すなわち、気負わず、実用に則した、速書および速写を意識した書体であり、石川氏が述べる「筆記の書」<sup>(71)</sup>としての意義が伝わってくる書風である。

尚、大野晋ら先行研究者の時代、定家の書風が、年齢により異なることは知られていなかった。その原因の一つは、定家が晩年に「浄書」即ち書き改めを行っていたことと関連する。例えば、定家自筆本・天理大学附属天理図書館蔵『治承四五年記』に見られる定家十九歳、治承四年『明月記』の書風は、明らかに定家五十歳代以降の定家独自の書風即ち手書「定家様」である。『天理図書館稀観書図録』の解説は、次のように述べる。

本日記の自筆本は、断簡を含め多く巷間に伝わるが、掲出本は治承四・五年のもの。現存伝本では最も早年に属するが、実は晩年の浄書であり、源平争乱に対する「紅旗征戎非吾事」の政事に無関心を装う有名な文言も、後年の加筆とされる(重文)<sup>(72)</sup>

すなわち、その書風から、治承四年『明月記』は、「定家晩年の浄書」と極められている。

そして、定家の若年の書風について、名児耶氏は「現存する遺墨の中に、連綿の見事な、これが定家の書なのだろうかと思われるものが存在して

いる。それらは、伝定家筆ではなく、紛れもなく定家筆なのであり、四十歳以前に書いたものに見ることができる。」<sup>(73)</sup>即ち、「藤原定家も平安時代の内は、古典の仮名に近い、流麗と称される仮名を書いた」<sup>(74)</sup>しかし、「鎌倉時代にはいると、実用本位の特異な字形、いわゆる定家様を築きあげていった」<sup>(75)</sup>、と述べている。

若い頃、定家(一一六二―一二四一)は、世尊寺家五世当主・藤原定信(一〇八八―一一五一―一一五三頃没)の書学び、その影響を受けたと言われる。その例の一つが、後述する、飯島春敬コレクション<sup>(76)</sup>、藤原定家筆「歌合切」(「通具俊成卿女歌合」)一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵(参照・資料⑨)である(以下、一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵を飯島春敬コレクションと記す)。この定家の書について、飯島氏は「極めて若い頃の筆跡であろう。彼の習癖があまり出ていず、清新な感覚を発揮しており、定信様式の扁平な、いかにも速写らしい流動的な線の展開する書風である。」<sup>(76)</sup>と述べている。

一方、島谷弘幸氏は、定信の書風について「西本願寺三十六人集 貫之集下」の断簡「石山切」を例にあげ、「詞書に続けて『春やいぬるあきやはくらむ／おほつかなかのくちきとよ／をすくすみは』の和歌一首と次の詞書を大胆な筆致で書き進めている。かなりの早書きで、必ずしも典麗優美な、いわゆる古筆切とは異なり、個々の字形の美しさよりも文字の流れやメリハリを重視している。」<sup>(77)</sup>と評している。

あらためて、定家若書きの、飯島春敬コレクション「歌合切」<sup>(78)</sup>を、藤原定信筆「石山切」(参照・資料⑧)と比較してみると、若年の定家の書は、定信の書風を受け継いだ、やや右肩上がりであり、しかも、運筆が早いと言う、自由で大胆な魅力のある書風である。

なお、名児耶氏は、定家の若書きの書について、次のように述べている。

定信の書に共通の特徴をみることができる。古典書写を日常の大

事とする定家であれば、多くの名筆に接していたわけで、それらの要素が定家の書に混じり合っていることはごく自然のなりゆきだったはずである。——中略——つまり定家の書も、生まれは王朝書流の中であつたが、やがて鎌倉時代初期の新鮮で力強い気風の中に育ち、次第に独自の書を形成していったのである<sup>(79)</sup>。

したがって、定家若書きの書風は、藤原定信の書風による影響のみならず、多くの王朝書流、即ち、平安時代の「かな（女手）」書的主流である、流麗な美を表現する書風をも踏まえたもの、と考えられる。

その定家若書きの書風の例である、飯島春敬コレクション「歌合切」<sup>(80)</sup>等の出典、『通具俊成卿女歌合』について、渡邊裕美子氏は、次のように述べている。

『通具俊成卿女歌合』は、定家自筆とされる古筆切から、その内容が知られているに過ぎない歌合である。しかし、現在確認できるだけで三〇首中五首——中略——が『新古今集』に入集しており、ある程度、重視された和歌集のひとつであつた——中略——先学の考察によつて指摘されている歌合の基本的な性格を抑えると、次のようになる。

- 一、通具が左歌、俊成卿女が右歌を詠んだ二人だけの私的な歌合である。
- 二、判者は定家で、定家自筆切は草稿にあたる。
- 三、春一五番、夏一〇番、秋一五番、冬一〇番の四季歌のみ五〇番の構成をとる。
- 四、成立は、『新古今集』各撰者が歌稿を整えて奉った、建仁三年（一一一三）四月二〇日以前である<sup>(81)</sup>。

渡邊氏が述べるように、飯島春敬コレクションを始めとする「歌合切」は、源通具（藤原俊成女の夫）と藤原俊成女（藤原俊成の孫で養女）との和歌に限られており、判者は藤原定家自身であること等から、私的な歌合と考えられる。なお、藤原俊成女については「建久元年、二十歳頃、源通具の妻となり、一女と一男具定を生む。」<sup>(82)</sup>と、述べられていること等から、『通具俊成卿女歌合』が記されたのは、建久元年（一一九〇）以降、建仁三年（一一一三）以前、すなわち、定家三十歳代の書と推定する。

そして、島谷弘幸氏が述べるように、定家の書風の変化の兆しが、正治元年（一一九九）、定家数え三十八歳の時の書と推定されている「書状」<sup>(83)</sup>等に、見られ始める。この定家の新たな書風は、連綿を抑え、一文字一文字放ち書きをしている、即ち、連綿が殆ど見られないという特徴が見られる。これは、王朝風の定家若年の書風から、誤写・誤読を防ぐ為の定家独自の書風即ち、手書「定家様」への移行を示す過程に於ける、多様な「変途上の定家の書風」の例の一つであろう。次第に、定家は自らの書風を、正確さを重要視する手書「定家様」へと変化させて行くのである。

そして、書風については記されていないが、定家四十六歳、承元元年（一一一七）五月二日の『明月記』には、後鳥羽上皇から、誤写がなく正確かつ早書きであると、『新古今和歌集』御点検の清書を求められた、すなわち、その正確さが評価されていることが述べられている。

前述したように、若い頃、定家は、世尊寺家五世当主・藤原定信（一一八八—一一五一—一一五三頃没）の書（参照・資料⑧）を学び、その影響を受けたと言われる。この定信の書を起点として、管見ではあるが、定家の書を選び、定家若年の書風が、変途上の書風を経て、更に、定家独自の書風へと変化する過程を、次のように紹介する。

## ○定家若年の書風

＊重要文化財・定家自筆「入道大納言資賢集」(部分) 一冊 五島美術館蔵

定家二十一歳、寿永元年(一一八二)八月六日の奥書がある。この奥書について、名児耶氏は「年号はどうも定家らしい字」<sup>(84)</sup>、「漢字には、若くして定家独特の丸味があることを知る」<sup>(85)</sup>と、述べる、即ち、藤原定信の影響が窺える「定家若年の書風」である。但し、本文は、定家二十一歳の書であれば、定信の影響が見られる筈であるが、異質の書風である。又、大野晋氏は、寿永元年八月、定家が書写させた入道大納言資賢集について、「この本は、入道大納言資賢の歌を誰かに写させ、その題詞の部分を定家が補ったものである。(こういう書写の仕方を、定家は金槐集でも行っている―以下省略)」<sup>(86)</sup>と、述べられている。なお、小川剛生「藤原定家書写典籍一覽」<sup>(87)</sup>によれば、定家の書写活動は、この定家二十一歳、寿永元年(一一八二)を皮切りとする。

＊定家自筆「歌合切」 紙本墨書 一幅 鎌倉時代 定家三十歳代

十二世紀 一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵(参照・資料⑨)

この定家自筆「歌合切」(『通具俊成卿女歌合』)は、定信の書風を受け継いだ、やや右肩上りで縦長の「かな(女手)」を、流麗な連綿を駆使し、私的な歌合の手控えである為か、のびやかな筆致、しかも運筆が早い自由で大胆な魅力のある「定家若年の書風」で書されている。尚、前述したように、『通具俊成卿女歌合』が行われたのは、建久元年(一一九〇)以降、建仁三年(一二〇三)以前とされる。したがって、定家三十歳代の書である。

＊定家自筆「反古懷紙」 一幅 五島美術館蔵 定家三十歳代後半 十二

―十三世紀(参照・資料⑩)

冒頭の潤筆で書された清書、即ち、歌題「詠初冬風和歌」及び、署名「左

近衛権少将藤原定家」、そして和歌一首を、定信の書風の影響を思わせる晴の書風で「けふよりはふゆのあらしの／たつたかは」まで書してから、反古にし、その後には、手紙や草稿、すなわち、下書き様のものを、伸びやかな、褻の定信風の書きぶりで記している。

＊定家自筆「三首詠草切」 紙本墨書 定家三十歳代後半 一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵 十二―十三世紀(参照・資料⑪)

「おそらく、作歌の後、父の俊成に見せたものと思われ、合点が付されている。三首とも『藤原定家全歌集』には未掲載」<sup>(88)</sup>と言う、定家の和歌の詠草である。定信風の書きぶりではあるが、前述の「歌合切」、「反古懷紙」等よりも、やや太めの線質である。

## ○変化途上の定家の書風

＊定家自筆「一紙両筆懷紙」 一幅 永青文庫蔵 定家三十九歳(参照・資料⑫)

潤筆で「鳥」と題字が書かれ、定信の影響が残る「かな(女手)」で書した、自詠の和歌に、父・俊成の評を行間に受けた、『正治二年(一二〇〇)院初度百首和歌』の歌稿、すなわち、勘返状である。

＊国宝・定家自筆『熊野御幸記』 一卷(部分) 三井文庫蔵 定家四十歳(参照・資料⑬)

定家が唯一、後鳥羽上皇の熊野詣に随行した建仁元年(一二〇一)の道中記、すなわち、褻の書である。そして、この「熊野詣の際、途中の藤代王子で詠んだ和歌。熊野御幸記に記述が遺る。」のが、晴の書、藤原定家筆「熊野懷紙 一幅」(蔵書先の記載なし。「特別展『定家様』五島美術館展覧会図録」<sup>(89)</sup>である。尚、これらの書風は「かな(女手)」に、やや右肩あがりの定信の影響が残る、すなわち、「変化途上の定家の書風」である。

そして、前述の、＊定家自筆「反古懷紙」 一幅 五島美術館蔵(資料⑩)と、比較すると、晴の書風で書された歌題および署名は類似しているが、

一字一字の文字の線質に肥瘦が表われ始めている。

尚、線の肥瘦に少し差が見られるが、Ⅲ 国文研本『定家卿書式』奥書群および刊記、で前述した、近衛信尹筆「定家『熊野懷紙』写 一葉」(参照資料②)は、藤原定家筆「熊野懷紙 一幅」と同様に、後鳥羽上皇の熊野詣の際、滝尻王子での歌会で詠んだ、定家の和歌懷紙の臨書である。尚、原本の存在は不明と言う<sup>(90)</sup>。

＊定家自筆「詠草」一幅 陽明文庫蔵 定家四十六歳(参照・資料⑭)  
建永二年(一二〇七)四十六歳の時、「最勝天王寺名所御障子歌」の為に詠み、不採用と成った歌の内、後に、第十一代勅撰集『続古今和歌集』(一二六五年成立)に入集した、「泊瀬山」の一首を書いた藝の書である。潤筆の連綿体で三行に書いている。試行錯誤を繰り返していたことを示す、変化途上の定家の書風の例の一つであろう。

○定家独自の書風(手書「定家様」)

＊定家真筆『一宮紀伊集』(部分)一冊 天理図書館蔵 推定・定家五十歳代(参照・資料⑮)

すでに、墨量ゆたかなための線質が中心となっている、生き生きとした筆致の此の書は、名児耶氏が、「流麗さ、連綿などは晩年にはみえない特徴である。五十代の書写か」<sup>(91)</sup>と、述べる、手書「定家様」完成間近を思わせる作品である。これは国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』に近い、勢いのある書風である。

＊定家自筆『拾遺愚草』<sup>(92)</sup>(参照・資料⑯)

定家五十五歳、「建保四年三月十八日書之」の奥書がある。この定家自筆『拾遺愚草』について、久保田淳氏は、「正編三巻の第一次成立が建保四年(一二二六)三月十八日、定家五十五歳の春であったことが知られる」<sup>(93)</sup>と述べられている。したがって手書「定家様」が完成したのは、定家五十歳代半ばと考える。

＊重要文化財・定家自筆「願文案(石清水八幡宮田中宗清願文)」一卷

天理図書館蔵 貞応二年(一二三三)、定家六十二歳(参照・資料⑰)  
これは、石清水八幡宮司・田中宗清の依頼を受け、定家が「漢字」「かな(女手)」混じりで認めた、願文の控えである。国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の原本、即ち、定家自筆『下官集』に近い時代の手書「定家様」と考えられるが、藝の書である為か、『明月記』寛喜三年(一二三二)八月七日条の「其の字、鬼の如し」<sup>(94)</sup>、と言われるほどの迫力は見られない。

＊国宝・定家真筆『古今和歌集』一冊 冷泉家時雨亭文庫蔵(参照・資料⑱) 嘉祿二年(一二二六)、定家六十五歳  
「詠十五首和歌」と同時期に書され、墨量の変化及び線の肥瘦が見られ、さらに気品も感じられる、晴の手書「定家様」の作品である。

＊重要文化財・定家自筆「詠十五首和歌」(部分) 前田育徳会蔵(参照・資料⑲) 嘉祿三年(一二二七)、定家六十六歳

この作品を、国宝『古今和歌集』(冷泉家時雨亭文庫蔵)と比較すると、晴の手書「定家様」で書されていることは一致するが、嘉祿三年(一二二七)、定家六十六歳、道助法親王歌会における詠歌を、やや細めな線や渴筆も見られる、ゆつたりとした筆致で書した作品である。

＊定家真筆『後撰和歌集』天福二年本 冷泉家時雨亭文庫蔵 定家七十三歳(参照・資料⑳)

この定家の天福二年(一二三四)七十三歳の書風も、確かに、晴の手書『定家様』であるが、既に、年齢による衰えを窺わせる、瘦せた、しかも衰えが見られる線質となっている。尚、この定家真筆『後撰和歌集』には、余り衰えの見られない筆致の、別筆を思わせる「定家様」の書も含まれている。

以上、管見ではあるが、定家の書が、定家若年の書風、変化途上の定家の書風、そして定家独自の書風、即ち、手書「定家様」へと、年月を掛けて変化した過程を辿ってきた。その中で、先ず、手書「定家様」へ

の変化が見られるのが、前述したように、名児耶氏が「流麗さ、連綿な  
どは晩年にはみえない特徴である。五十代の書写か」<sup>(95)</sup>と、述べられる、  
『一宮紀伊集』(参照・資料⑮)である。又、嘉禄二年(一二二六)定家  
六十五歳の時に書かれた、定家真筆の国宝『古今和歌集』(参照・資料⑮)  
及び、嘉禄三年六十六歳の時の、重要文化財「詠十五首和歌」(参照・資  
料⑲)などの作品の書風は、既に、手書「定家様」が、完成しているこ  
とを示している。

なお、一目で定家の書と解る、手書「定家様」で書されている作品は、  
定家五十五歳、「建保四年三月十八日書之」の奥書が見られる、定家自  
筆『拾遺愚草』<sup>(96)</sup>(参照・資料⑳)であろう。

一方、久保田淳氏は「定家の典籍書写にしばしば見られるごとく、こ  
こでも定家の書風に酷似した字を書くその側近の者が定家の綿密な指示  
の下に書写したのち、定家がそれを点検し、校訂したのではないかとい  
う見方も可能である。本解題筆者と共にこの本の調査に当たった藤本孝一  
氏はそのように考えておられている」<sup>(97)</sup>と、記されている。

この側近の者による書写については、家人博徳氏も、定家自筆『近代  
秀歌』について、「『定家自筆』として称されているものの、定家側近の  
人物によって書写されている可能性があるのである」<sup>(98)</sup>と述べる。

ただし、久保田氏は、「この問題については、今後の研究に俟ちたいが、  
もしもそのような方式で書写されたとしても、定家が全体にわたって点  
検し、自身手を下して校訂しているからには、この本を定家自筆本と呼  
ぶことは誤りではないであろう。また、もとよりこの本の価値を損うも  
のでもないであろう」<sup>(99)</sup>と、述べる。確かに、和歌集としての、定家  
自筆・冷泉家時雨亭文庫蔵『拾遺愚草』の価値についての久保田氏の説  
は妥当である。これは、前述した定家七十三歳の、定家真筆『後撰和歌集』  
天福二年本、も同様である。

一方、定家独自の書風、即ち手書「定家様」の完成時期について言えば、

久保田氏が述べられるように、定家自筆『拾遺愚草』の第一次成立が建  
保四年であり、この頃、定家の側近による代筆が行われていたというこ  
とは、手書「定家様」が、建保四年(一二二六)以前に完成し、側近の人々  
は、既に、この書風の使いこなす程の技量に達していた裏付けとなる。  
したがって、国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の  
祖本、即ち、定家自筆『下官集』を、この定家側近の人々は、代筆する  
技量を充分持っていた可能性がある。

しかし、稿者は、次に記す、国文研本『定家卿書式』の書写奥書が、  
定家真筆であることを裏付けるものであると考えている。

此一卷堀尾出雲守所持也閑

覽多幸之余令書寫了

慶長八年卯月廿五日 信尹

定家自筆『下官集』を臨模し、この書写奥書を記した人物は、前述した  
ように、青蓮院流を、若年期に学び、既に天性の能書としての才を表し、  
更に、慶長四年(一五九九)信尹と改名した頃から、定家を歌人、歌学  
者として尊崇するばかりでなく、その書にも傾倒して学び、これを自家  
薬籠中のものとして「江戸初期の三筆」と讃えられた近衛信尹である。  
したがって、信尹が、定家自筆であるとの判断を下すことは可能であっ  
たと思われる。それを裏付けるのが、現在、陽明文庫におさめられている、  
数多くの定家自筆の書と、それを写した信尹の臨書であろう。

なお、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』「一書  
哥事」の条(参照・資料①第五紙)の和歌の書風と、定家自筆『拾遺愚草』  
の書風を比較した。

前者では、「さくらちるこのしたかせは さむからてそらにしられぬ  
ゆきそふりける」(拾遺集一・春六四、紀貫之)の歌が、所謂「変体仮名」

を交えた「かな（女手）」で、次のように記されている。

佐くらちるこのし堂可せ者 さむ可  
らてそらにしらぬゆきそふり介累

この歌の第一句、「佐くらちる」の「佐くら」を、定家自筆『拾遺愚草上下』のうちの「佐くら者那<sup>はな</sup>」（六〇一番歌）および「佐くら花」（六〇五番歌）（参照・資料②）を始めとする「佐くら」と比較した。いずれも定家独自の書風である。この書風の一致も、また、国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の祖本の成立の上限は、定家自筆『拾遺愚草』が執筆された建保四年頃であることを裏付ける。

尚、本稿では簡略に述べるが、この大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の祖本・定家自筆『下官集』執筆時期の上限を、建保四年（一二一六）頃と推定するに至った、もう一つの根拠は、遠藤和夫氏が、遠藤（二〇〇七）「親行本『下官集』考」で紹介された、新出の金沢文庫保管・親行本『下官集』（写本）に見られる、本文末尾の「大炊権助源親行」の署名および「建保五年八月十日」の年月日である。

遠藤氏は、親行本『下官集』の「第一の特徴は、末尾に『大炊権助源親行』の署名の文書が存在することである——中略——この文書によって、行阿の捏造ではなくて、源親行が『下官集』の著作に關与していたことが証明される。」<sup>(100)</sup>と述べ、親行本『下官集』本文末尾の文書的大意については、「建保五年八月十日、治部卿定家さまが、その家集一卷一帖の『拾遺愚草』を私に清書して献上することを所望なさった。そこで、文字の誤謬を校訂するために詳しい〈書き様〉をお定めくださった。そこで旧女房の仕来りを守って、我が悪筆をも顧みず、従事しただけのことです。」<sup>(101)</sup>と記している。

そして、稿者が、定家存命中の「建保五年（一二一七）八月十日」の

年月日、および、「大炊権助源親行」の署名と共に注目したのは、後述する、親行本『下官集』独自の構成である。この親行本『下官集』を含め、定家生前の年号を持つ『下官集』伝本は、治承二年（一一七八）本が三本、嘉禎四年（一二三八）本が一本、計五本の写本が存在する。五本の写本は次の通りである。

○国文学研究資料館蔵『倭歌作法』・写本（治承二年）

○国立歴史民俗博物館蔵 高松宮家伝来禁裏本『和歌愚僻抄』・写本（治承二年）

○三康図書館蔵『和歌会次第』・写本（治承二年）

○金沢文庫保管 親行本『下官集』（『九条錫杖（巻頭下官集）』・写本（建保五年）

○国文学研究資料館蔵『詠歌聞書』・写本（嘉禎四年）

以上、五本の写本のうち、最古の治承二年（一一七八）の年号が見られる、国文学研究資料館蔵『倭歌作法』始めとする三本の写本に記されている「和歌会作法」の内容は、『袋草子』から抄出した「和歌会次第」である。この「和歌会作法」について、大野晋氏は、次のように述べる。

治承二年は、定家が十七歳の年であり、その年三月十五日にはじめて定家は「加茂別雷社歌合」に三首入選している。おそらくその頃から定家が歌の勉強を始めたと見てよいであろう。そこで、父俊成から、和歌会の次第について教示を受けるために、このような書物を作ったと見ることができよう。「和歌会作法」のような書物若年十七歳にして定家が所持したということは、定家が後に、和歌の言葉の書き方を整理統一して「僻案」（つまり下官集）を作る素地をなしたものとして注意すべきである<sup>(102)</sup>。

『袋草子』の著者は藤原清輔（一一〇三―一一七七）で、上巻・下巻と

もに、保元二年から三年(一一五七―一一五八)に成立している。したがって、治承二年(一一七八)頃、歌の勉強を大いに始めた定家が、歌会・撰集・歌合などに関する知識や故実を学ぶため、『袋草子』抄出「和歌会次第」を書写し、「和歌会作法」として所持していたのではないであろうか。「和歌会作法」の内容は、『袋草子』の「一、和歌会次第」から「二、探題和歌」の始めの「探題トハ―中略―只題如前ト書云々」までの内容に近似している。

次に、前述した定家生前の年号を持つ五本の『下官集』写本、そして模刻本・大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』、更に、国文研本『定家卿書式』の写本をも含めて、八本の『下官集』伝本を構成別に分類して示す。尚、『下官集』本文のイは僻案、ロは五箇条、ハは頭注である。内容の差異については、稿を改めて述べる。

① 『下官集』本文(イ(無し) + ロ(五箇条) + ハ(無し)) + 定家の『和歌書様』 + 『袋草子』抄出(治承二年(一一七八)定家十七歳)

1、国文学研究資料館蔵『倭歌作法』・写本

2、国立歴史民俗博物館蔵 高松宮家伝来禁裏本『和歌愚僻抄』・写本

3、三康図書館蔵『和歌会次第』・写本

② 『下官集』本文(イ(無し) + ロ(五箇条) + ハ(無し)) + 定家の『和歌書様』(建保五年(一二二七)定家五十六歳)

4、金沢文庫保管 親行本『下官集』(『九条錫杖(巻頭下官集)』・写本)

③ 『下官集』本文(イ(僻案) + ロ(五箇条) + ハ(頭注①及び②)) (定家自筆『下官集』を祖本とする。署名・執筆年号無し)

5、大東急記念文庫蔵『定家卿模本』・模刻本

6、国文学研究資料館蔵『定家卿書式』・模刻本

7、京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『定家卿書式』模本・写本

↓ 国文学研究資料館蔵『定家卿書式』を大正五年(一九三〇)書写

④ 『下官集』本文(イ(無し) + ロ(五箇条) + ハ(頭注②のみが「一嫌文字事」の条の例の中に有り)、(嘉禎四年(一二三八)定家七十七歳)

8、国文学研究資料館蔵『詠歌聞書』・写本

以上の『下官集』伝本構成を比較すると、②・④、金沢文庫保管「親行本『下官集』」の構成は、①・①・②・③、即ち、三本の治承二年(一一七八)本と、③・⑤、大東急本『定家卿模本』および、⑥、国文研本『定家卿書式』の二本の模刻本の中間に位置する構成である。そして、④・⑧、嘉禎四年(一二三八)本は、③・⑤・⑥、即ち、二本の模刻本から、イ(僻案)および、ハ(頭注②)が削除されている構成である。

この構成の変化を辿ると、国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の祖本・定家自筆『下官集』の執筆時期は、すでに「『袋草子』抄出」が存在しない②・④、親行本『下官集』の成立後、そして、④・⑧、国文学研究資料館蔵『詠歌聞書』執筆以前である。

但し、④・⑧、国文学研究資料館蔵『詠歌聞書』が書写された嘉禎四年(一二三八)は、定家七十七歳で、すでに定家独自の書風の衰えが見られる『後撰和歌集』天福二年(一二三四)本(参照・資料②⑩)が書かれた、定家七十三歳の時点より後である。

したがって書風から見て、国文研本『定家卿書式』および大東急本『定家卿模本』の祖本である定家自筆『下官集』が執筆されたのは、定家自筆『拾遺愚草』が成立した、建保四年(一二二六)以降、更に、親行本『下官集』が書かれた建保五年から、然程、遅くない時期、即ち、定家五十年代後半頃と、推定する。

## おわりに

これまで、先行研究においても、「三藐院関白臨定家卿書」の表題を持つ模刻本、大東急本『定家卿模本』、国文研本『定家卿書式』（橋本進吉氏旧蔵本）は、藤原定家『下官集』研究の最善本と位置付けられてきた。本稿では、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』を『下官集』研究を進める基準伝本と位置付けるために、その祖本である定家自筆『下官集』の臨写本を作成した能書・近衛信尹、そして、信尹臨写本を鑄した名彫師・井上慶寿の技量を確認した。それにより、模刻本が正確に、定家自筆本を再現したものであろうと言う信頼の裏付けとした。

更に、藤原定家の書風が年齢により異なることに着目し、これを手掛かりとし、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』の祖本である定家自筆『下官集』の執筆時期の上限は、定家独自の書風が完成した定家五十歳代半ば、即ち、建保年間に相当することを確かめることが出来た。したがって、書写時期の確認ができた、大東急本『定家卿模本』および国文研本『定家卿書式』を基準伝本と位置付け、藤原定家『下官集』研究を進める基盤とする。

この結果を受け、次稿では、二本の模刻本と、定家存命中の年号を持つ五本の写本を比較し、その書式および内容に見られる差異から、複数の『下官集』祖本の存在について言及する。

## 注

- (1) 小川剛生『中世の書物と学問』、山川出版、二〇〇九年、〇二二頁
- (2) 大野晋『仮名遣と上代語』、岩波書店、一九八二年、三〇頁
- (3) 浅田徹「下官集の諸本―付・大東急記念文庫「定家卿模本」翻刻―」（『国文学資料館紀要』第二十六号、二〇〇〇年）、八七頁
- (4) 吉沢義則「定家の仮名遣」（『芸文』、一九二二年、『国語国文の研究』、

岩波書店、一九二七年に収録）

- (5) 大野晋『仮名遣と上代語』、岩波書店、一九八二年、二七頁
- (6) 浅田徹「下官集の諸本―付・大東急記念文庫「定家卿模本」翻刻―」（『国文学資料館紀要』第二十六号、二〇〇〇年）、二六〇二七頁
- (7) 大野晋『仮名遣と上代語』、岩波書店、一九八二年、二七頁
- (8) 浅田徹「下官集の諸本―付・大東急記念文庫「定家卿模本」翻刻―」（『国文学資料館紀要』第二十六号、二〇〇〇年）、九一頁
- (9) 「双鉤填墨」（『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年、三五〇頁）
- (10) 中野三敏「拓印」（『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年、三三三頁）
- (11) 山岡浚明編『類従名物考』（『日本古典文学大辞典』第六卷、岩波書店、二五六頁）
- (12) 京都産業大学日本文化研究所紀要 第十四号「（京都産業大学日本文化研究所公開シンポジウム（平成十八年七月十六日・キャンパスプラザ京都） 定家様と擬定家―擬定家本私歌集の出現をめぐって―藤本孝一 名児耶明 小林一彦、二〇〇九年、一三四頁）
- (13) 同上、一三五頁
- (14) 同上、一三五頁
- (15) 石川九楊『日本書史』、名古屋大学出版会、二〇〇一年、三五六頁
- (16) 冷泉為人「冷泉家・蔵番物語「和歌の家」千年をひもとく」、日本放送出版協会、二〇〇九年、三七頁
- (17) 「手書（しゅしょ）」、堀江知彦、飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年、三四三頁
- (18) 飯島春敬「伝藤原俊頼筆 元永本古今集 解説」、書芸文化院、一九六八年、六五頁
- (19) 浅田徹「大東急記念文庫蔵「定家卿模本」（下官集）について（「かがみ」第三十六号、大東急記念文庫）二〇〇三年、一〇一六頁
- (20) 同上、一〇一六頁
- (21) 吉田紀恵子「『下官集』模刻本に関する一考察―かな書道家の視点で―」（『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.13、二〇一二年、一九九二〇一頁、を再掲する）。
- (22) 小川剛生『中世の書物と学問』、山川出版、二〇〇九年、〇二〇頁

- (23) 吉田紀恵子「藤原定家『下官集』に関する一考察―かな書道作家の視点で―」(日本大学大学院総合社会情報研究科紀要No.13、二〇〇八年)三八三―三八七頁
- (24) 浅田徹「下官集の定家―差異と自己―」(『国文学資料館紀要』第二十七号、二〇〇一年)七七頁
- (25) 同上、八〇頁
- (26) 小川剛生「為衡の最後」(『日本古典文学会々報』三三四号)四頁
- (27) 「模写」『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年、五六九頁
- (28) 同上、五六九頁
- (29) 小松茂美編『日本書蹟大鑑』、講談社、一九七八年、一〇九―一九頁
- (30) 前田多美子『三藐院 近衛信尹 残された手紙から』、思文閣出版、二〇九頁
- (31) 小松茂美編『日本書蹟大鑑』、講談社、一九七八年同、五七
- (32) 名児耶明「第二章 定家の筆跡」(『特別展『定家様』五島美術館展覧会図録NO107』、一九八七年)、七七頁
- (33) 久米康生『和紙文化辞典』、わがみ堂、一九九五年、一四四頁
- (34) 小野晃嗣『\*叢書・歴史学研究\*日本産業発達史の研究』、法政大学出版局、一九九二年、二二―二三頁
- (35) 行阿「假名文字遣」(『福井久蔵編『国語学大系 第六卷』、国書刊行会、一九七五年)、一五頁
- (36) 飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年、四五六頁
- (37) 同上、四五六頁
- (38) 今川文雄訳『訓読明月記』、河出書房新社
- (39) 前田多美子『三藐院 近衛信尹 残された手紙から』、思文閣出版、二〇〇六年、二一五頁
- (40) 岡麓校訂『入木道三部集 附 本朝能書伝』、岩波書店、一九八七年、二七頁
- (41) 前田多美子『三藐院 近衛信尹 残された手紙から』、思文閣出版、二〇〇六年、二一九頁
- (42) 同上、二二〇頁・図二七
- (43) 同上、二二〇頁
- (44) 名児耶明「第二章 定家の筆跡」(『特別展『定家様』五島美術館展覧会図録NO107』、一九八七年)、七七頁
- (45) 前田多美子『三藐院 近衛信尹 残された手紙から』、思文閣出版、二〇〇六年、二一九頁
- (46) 浅田徹「下官集の諸本―付・大東急記念文庫『定家卿模本』翻刻―」(『国文学資料館紀要』第二十六号、二〇〇〇年)、九一頁
- (47) 丸山季夫「刻師名寄」(『国学者雑攷』別冊、吉川弘文館、一九八二年)一二―一四頁
- (48) 鈴木淳「二〇 板木師井上清風の刻業」(『江戸和学論考』、ひつじ書房、一九九七年、四三五頁)
- (49) 同上、四一九頁
- (50) 清水浜臣「泊泊文集」、無窮会神習文庫藏(写三冊)、卷二。整理番号一―二七四
- (51) 鈴木淳『江戸和学論考』、四二〇頁
- (52) 同上、四二〇頁
- (53) 「拓印」『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年、三七三頁
- (54) 宇野雪村「法帖」(飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年)七三四頁
- (55) 「傳藤原行成筆 重之集」(『日本名筆全集』第十五卷、書藝文化院、出版年記載なし)三―三九頁
- (56) 同上、八〇頁
- なお、植村氏の言う「本願寺本三十六人集」、即ち『西本願寺三十六人集』(天仁(一一〇八)頃書写)「重之集」(筆者不明)<sup>56)</sup>の最後には、尾州徳川家所蔵「傳藤原行成筆 重之集」に相当する「重之百首」が書されている。その書風は、時代的には近いと思われるが、尾州徳川家所蔵本(徳川美術館蔵)とは、あきらかに別手である。
- (57) 飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年、六七六頁
- (58) 同上、六七六頁
- (59) 「二、傳藤原行成筆 重之集」(『日本名筆全集』第十五卷、社団法人書藝文化院、年号不詳)、三―三九頁
- (60) 飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年、六七六頁
- (61) 中野三敏「拓印」(『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年)、三七三頁
- (62) 飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年、六七六頁

- (63) 中野三敏「拓印」(『日本古典籍書誌学辞典』、岩波書店、一九九九年)、三七三頁
- (64) 但し、原本と比較すると、三本の法帖「『尚古法帖』第十八 行成卿」は、同様に、和歌の行間が狭まっている箇所、そして、見開きの第八紙では、左右の頁の和歌が入れ替っている等の差異が見られる。刻師は、版下そのままに刻さなければならぬ立場である。これは、版下作成の際に起きた差異であろうか。尚、国会図書館蔵『尚古法帖』第十八行成卿 YR11 81、のみではあるが、第八紙では、左右の頁の和歌が入れ替っている。その見開きの頁の右肩それぞれには、「左」、「右」と朱筆の書き入れがある。それが何時、為されたのか、又、朱を入れた人物についても不明であるが、既に、原本との校合が行われていたことを示唆するものである。但し、朱筆が入れられているのは、この箇所のみである。
- (65) 飯島春敬『日本書道史要説』、東京堂出版、一九七五年、一八六頁
- (66) 小松茂美監修『日本名跡叢刊33』、二玄社、一九七九年
- (67) 石川九楊『日本書史』、名古屋大学出版会、二〇〇一年、三五六頁
- (68) 吉田紀恵子「『下官集』「書歌事」の条に関する一考察―和歌と仮名書記について―」(『日本大学大学院総合社会情報研究紀要』No.12、二〇一一年、一四三―一四四頁)
- (69) 冷泉為人「冷泉家・蔵番物語「和歌の家」千年をひもとく」、日本放送出版協会、二〇〇九年、三七頁
- (70) 飯島春敬『日本書道史要説』、東京堂出版、一九七五年、一八六頁
- (71) 石川九楊『日本書史』、名古屋大学出版会、二〇〇一年、三五六頁
- (72) 天理大学付属天理図書館編『天理図書館稀覯図録』、天理大学出版、二〇〇六年
- (73) 名児耶明監修「第六〇回毎日書道展特別展示「春敬の眼」―珠玉の飯島春敬コレクション―」図録、毎日新聞社・毎日書道会、二〇〇八年、図録三二四頁
- (74) 同上、図録一七頁
- (75) 同上、図録八一頁
- (76) 飯島春敬編『書道辞典』、東京堂出版、一九七五年、六九五頁
- (77) 島谷弘幸「書之美『石山切(貫之集下)』」(『毎日新聞、日曜くらぶ』第五面、二〇一六年一月二四日)
- (78) 名児耶明監修「第六〇回毎日書道展特別展示「春敬の眼」―珠玉の飯島春敬コレクション―」図録、毎日新聞社・毎日書道会、二〇〇八年、図録八一頁
- (79) 名児耶明「第二章 定家の筆跡」(『特別展「定家様」五島美術館展覧会図録20107」、一九八七年、五〇頁)
- (80) 名児耶明監修「第六〇回毎日書道展特別展示「春敬の眼」―珠玉の飯島春敬コレクション―」図録、毎日新聞社・毎日書道会、二〇〇八年、図録八一頁
- (81) 渡邊裕美子「新古今時代の表現方法」、笠間書院、二〇一〇年、一八九頁
- (82) 『日本古典文学大辞典 第五巻』、岩波書店、一九八四年、二八四頁
- (83) 島谷弘幸「書之美『筆の冴え 定家流の片鱗』」(『毎日新聞、日曜くらぶ』第五面、二〇一五年、三月一日)
- (84) 京都産業大学日本文化研究所紀要 第十四号、二〇〇九年、一四一頁
- (85) 「特別展「定家様」五島美術館展覧会図録20107」、一九八七年、八三頁
- (86) 大野晋「仮名遣と上代語」、岩波書店、一九八二年、四〇頁
- (87) 小川剛生「中世の書物と学問」、山川出版社、二〇〇一年、〇〇八頁
- (88) 平安書道研究会八〇〇回記念「平安古筆の名品―飯島春敬の観た珠玉の作品から」、二〇一六年、一四四頁
- (89) 名児耶明「第二章 定家の筆跡」(『特別展「定家様」五島美術館展覧会図録20107」、一九八七年、七六頁)
- (90) 同上、七七頁
- (91) 同上、八五頁
- (92) 『冷泉家時雨亭叢書 第八卷 拾遺愚草 上下』、一九九八年
- (93) 同上、解題、六頁
- (94) 今川文雄訳『訓読明月記』、河出書房新社
- (95) 名児耶明「第二章 定家の筆跡」(『特別展「定家様」五島美術館展覧会図録20107」、一九八七年、八五頁)
- (96) 『冷泉家時雨亭叢書 第八卷 拾遺愚草 上下』、一九九八年
- (97) 同上、解題、一六頁
- (98) 家人博徳「中世書写論―俊成・定家の書写と社会―」、勉誠出版、二〇一〇年、一六七頁

(99) 『冷泉家時雨亭叢書 第八卷 拾遺愚草 上下』、一九九八年、解題、一七頁

(100) 遠藤和夫著「親行本『下官集』考」(『日本語学の諸問題 國學院雜誌』二〇〇七年)、二五二頁

(101) 同上、二五四頁

(102) 大野晋『仮名遣と上代語』、岩波書店、一九八二年、二八頁

## 参照

資料① 『定家卿書式』 国文学研究資料館蔵

表紙、裏表紙

第一紙、第九紙

資料② 近衛信尹筆「定家『熊野懷紙』写 一葉」(『子楽院模写手鑑』所収) 陽明文庫蔵

資料③ 近衛信尹筆「和歌懷紙」(慶長七年「当家会初」) 陽明文庫蔵

資料④ 近衛信尹筆「詠草」 陽明文庫蔵

資料⑤ 近衛信尹筆「詠草」 陽明文庫蔵

資料⑥ 『尚古法帖第十八 行成卿』(Y R 11 81 (源重之百首 尾張 徳川侯蔵) 国会図書館蔵

資料⑦ 『傳藤原行成筆 重之集』(「重之百首」完本) 徳川博物館蔵

資料⑧ 藤原定信筆「石山切(本願寺本三十六人歌集) 貫之集下」 書芸文化院蔵

化院蔵

資料⑨ 定家自筆「歌合切」(「通具俊成卿女歌合」) 書芸文化院蔵

資料⑩ 定家自筆「反古懷紙」一幅 五島美術館蔵

資料⑪ 定家自筆「三首詠草切」一幅 書芸文化院所蔵

資料⑫ 定家自筆「一紙兩筆懷紙」一幅 永青文庫蔵

資料⑬ 国宝・定家自筆『熊野御幸記』一卷(部分) 三井文庫蔵

資料⑭ 定家自筆『詠草』一幅 陽明文庫蔵

資料⑮ 定家真筆『一宮紀伊集』一冊(部分) 天理図書館蔵

資料⑯ 定家自筆『拾遺愚草 上下』 冷泉家時雨亭文庫蔵(1)

資料⑰ 重要文化財・定家自筆『願文案(石清水八幡宮田中宗清願文)』一卷 天理図書館蔵

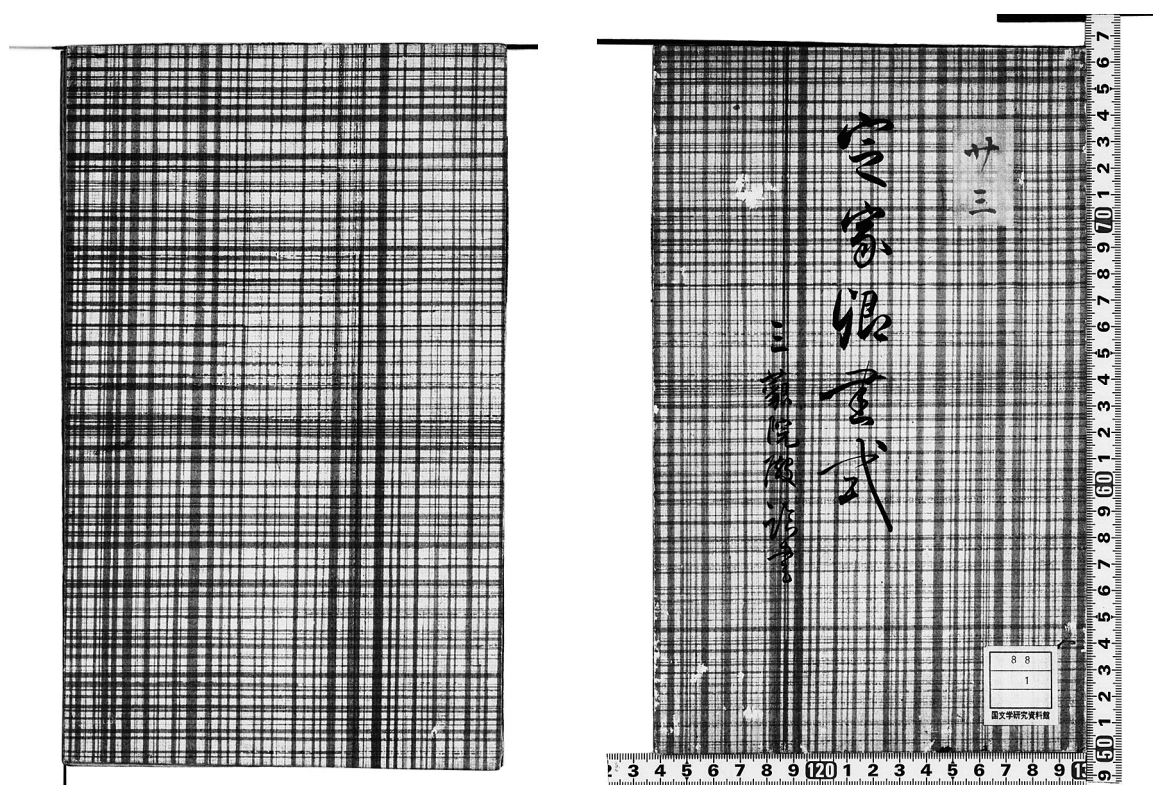
資料⑱ 国宝・定家真筆『古今和歌集』一冊(部分) 冷泉家時雨亭文庫蔵

資料⑲ 重要文化財・定家真筆『詠十五首和歌』(部分) 前田育徳会蔵

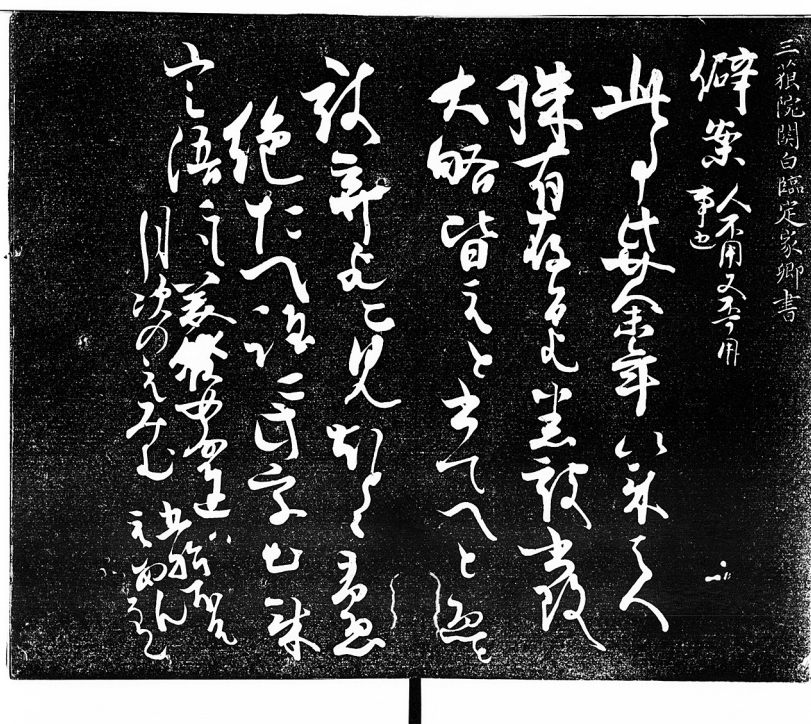
資料⑳ 定家真筆『後撰和歌集』天福二年本 冷泉家時雨亭文庫蔵

資料㉑ 定家自筆『拾遺愚草 上下』 冷泉家時雨亭文庫蔵(2)

資料① 『定家卿書式』 国文学研究資料館蔵  
表紙および裏表紙



第一紙



一書如草子事  
假名物多置右枚自左故書始之  
舊書方而書量竝如此先人又  
用之清順朝又用之或自右枚端  
書之侍之始如此下官付此說模  
漢字之偶本之草子右一枚事  
倭也似無異論之故也

緒へ音 ちちめつたて書え  
仍被用え  
わみふ ちよふ山 さいふ山  
きふのき さいふ ちふふめ  
むくはめ ちふふめ ちふふめ  
尾へ音 ちふふの奥山書へ故也  
たふ山 ちふふ ちふふ ちふふ  
花を枝 ちふふ ちふふ  
え 枝 ちふふ ちふふ 江  
留 ちふふ 消 ちふふ ちふふ  
たふ ちふふ ちふふ ちふふ ちふふ  
うのちめ ちふふ ちふふ ちふふ ちふふ

草木をうなく裁也  
まへうちもの人 栢か  
やふりけさ乃々 ささ人  
煮す煮 ゆる煮 煮 こそ煮  
繪 糸士 煮の 詠 煮の 煮の 煮の 煮の 煮の  
垣下 煮の 煮の 煮の 煮の 煮の

右事ハ非師説ハ教自思意見  
 舊草子に見え  
 一 假名字カキヨク事  
 一のう あまは るさふけりれ  
 りせき せき せき  
 如此書附よみさるゝ句を  
 けしゝる 大切 よきやまゆ也  
 一のうちに るさふけりれ  
 りせき せき せき  
 一 書哥事  
 知物揚々 梅放實態のうへを  
 下句に行き上は書  
 けしゝる 一のう せき せき  
 りせき せき せき

此は書到有具説常時至愚に唯達  
 而不釋上句只付讀要下句只付  
 於てあるのゝ凡そさむる  
 うゝゝゝぬゆゝゝゝゝゝゝ  
 真名を書文字數に添ふに付  
 上句一行はたすちけゝゝゝ關字  
 其所を置て次の行に下書下句は  
 一草子付色に符事しんじ 松溪有之  
 假令  
 古今和哥集卷第二  
 如けし所也  
 左板書始其事はた付件板  
 清南朝臣如此付

先人校讎書之付某書庫校  
 下官用之 以右手引披檢有便也  
 已上先人下官存之他人不圖心  
 三系中抄書所引氏等  
 未詳及涉解心之歟 如也  
 實家言等作在石至之付  
 如後 丁有涉隱密此終之  
 此紙 丁有抄在石

定家卿書記述一書衡朝進  
養德院中侍領之下紙  
此紙は、  
右奥書判、  
大圓、  
贈相府、  
由次、  
家次、  
平木、

新羅入年、  
此一巻、  
賢、  
度長、  
井上慶壽、

資料② 近衛信尹筆「定家『熊野懷紙』写 一葉」(『予楽院模写手鑑』所収)  
陽明文庫蔵

詠  
冬月照松和詩

左と松やぬるをきき

さーのほふ

ききをききききききき

松をう月おころいふ

濱月似雪

しききききききききき

月おころいふ

山をききききききき

定家集下官集不述予信尹筆

資料③ 近衛信尹筆「和歌懷紙」(慶長七年「当家会初」)  
陽明文庫蔵

詠  
梅内同豊

後詩

信尹

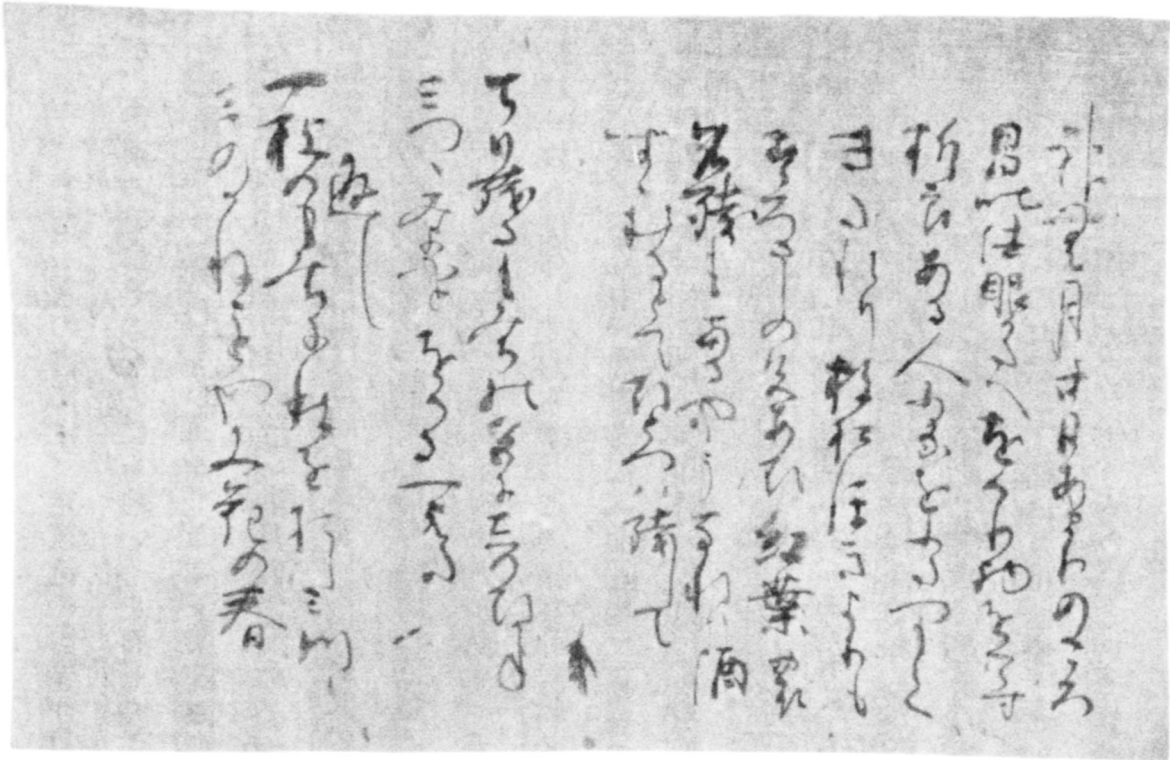
たうのばう

きく屋を梅お

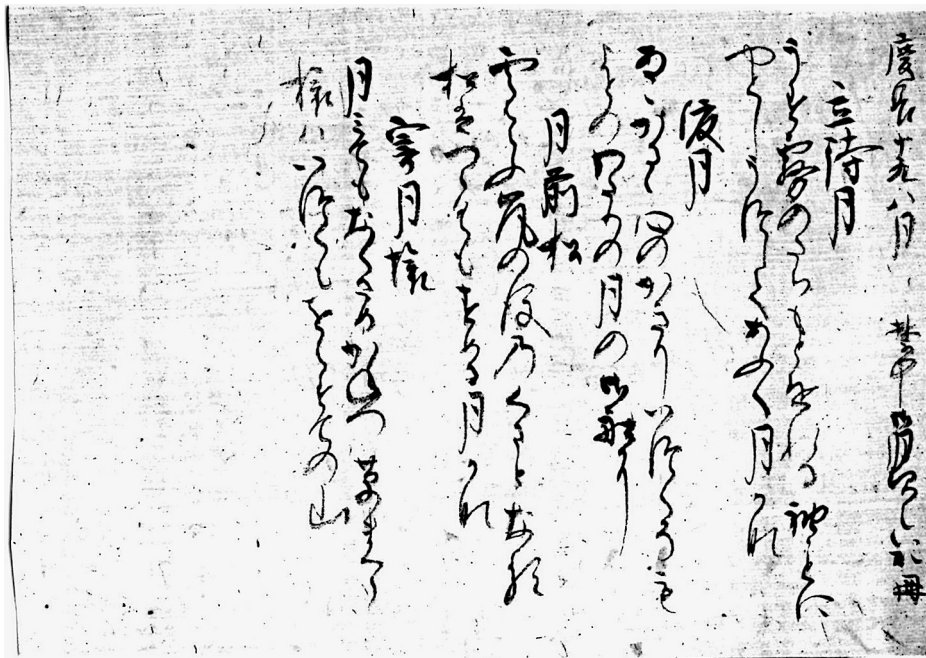
ほむをききききき

のこき

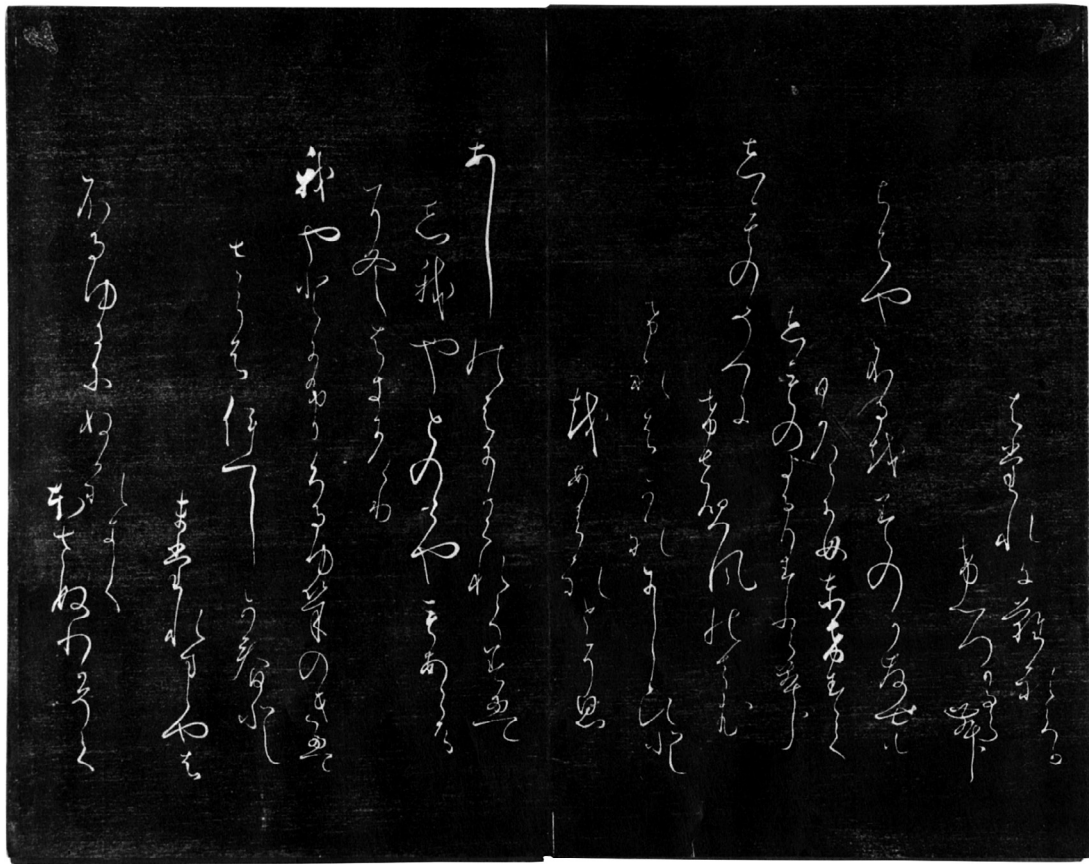
資料④ 近衛信尹筆「詠草」陽明文庫蔵



資料⑤ 近衛信尹筆「詠草」陽明文庫蔵

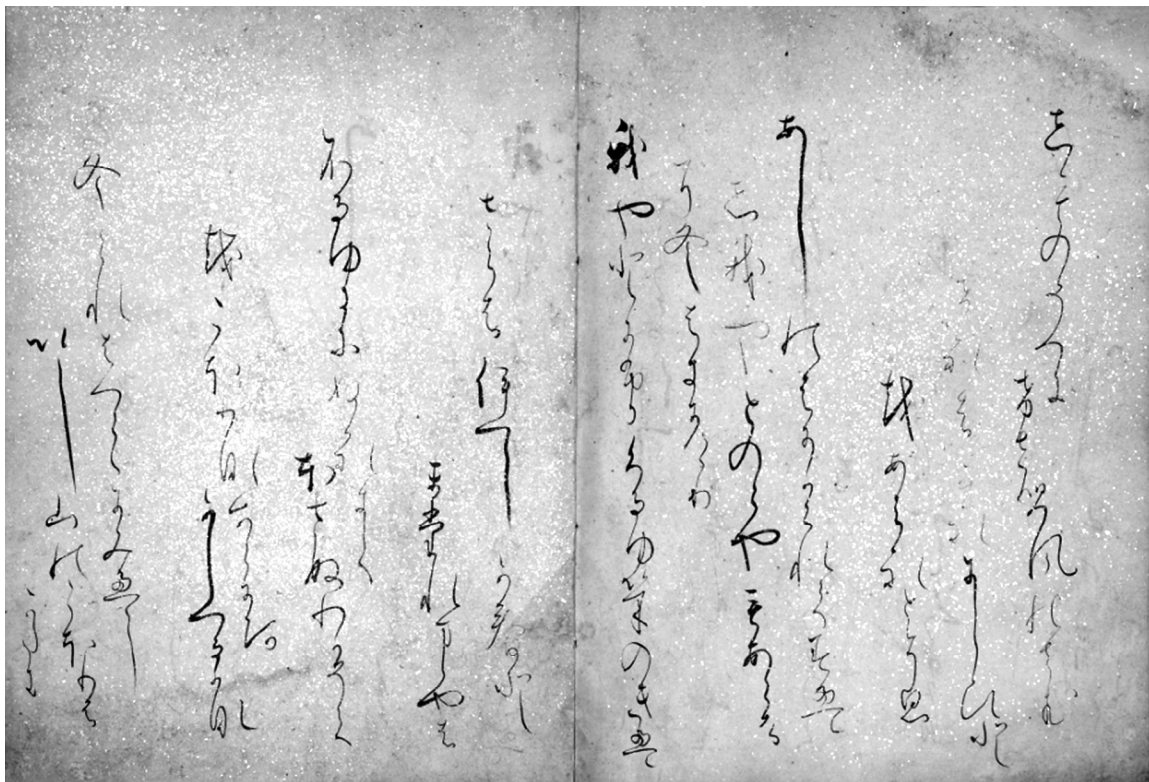


資料⑥ 法帖『尚古法帖第十八 行成卿』(YR11 81)〔源重之百首  
尾張徳川侯蔵〕 国会図書館蔵



資料⑦ 〔伝藤原行成筆 重之集〕(「重之百首」完本) 徳川博物館所蔵

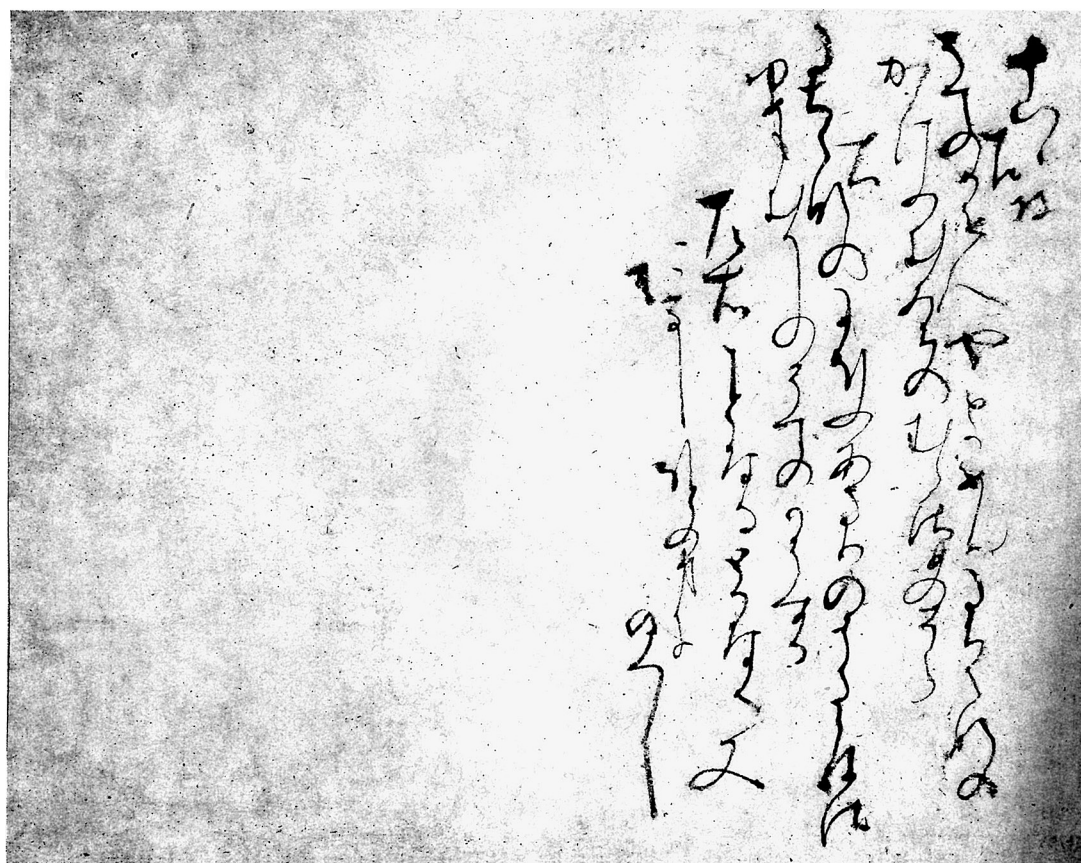
© 徳川美術館イメージアーカイブ / DNPart.com



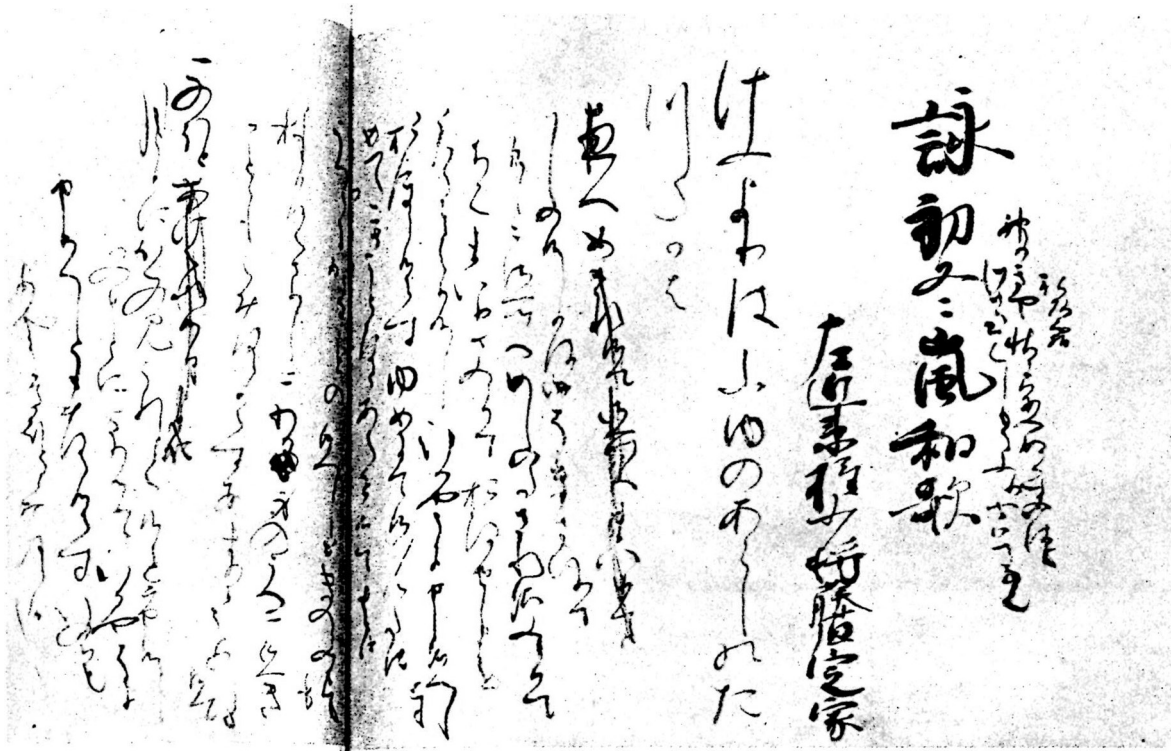
資料⑧ 藤原定信筆「石山切（本願寺本三十六人歌集）貫之集下」一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵



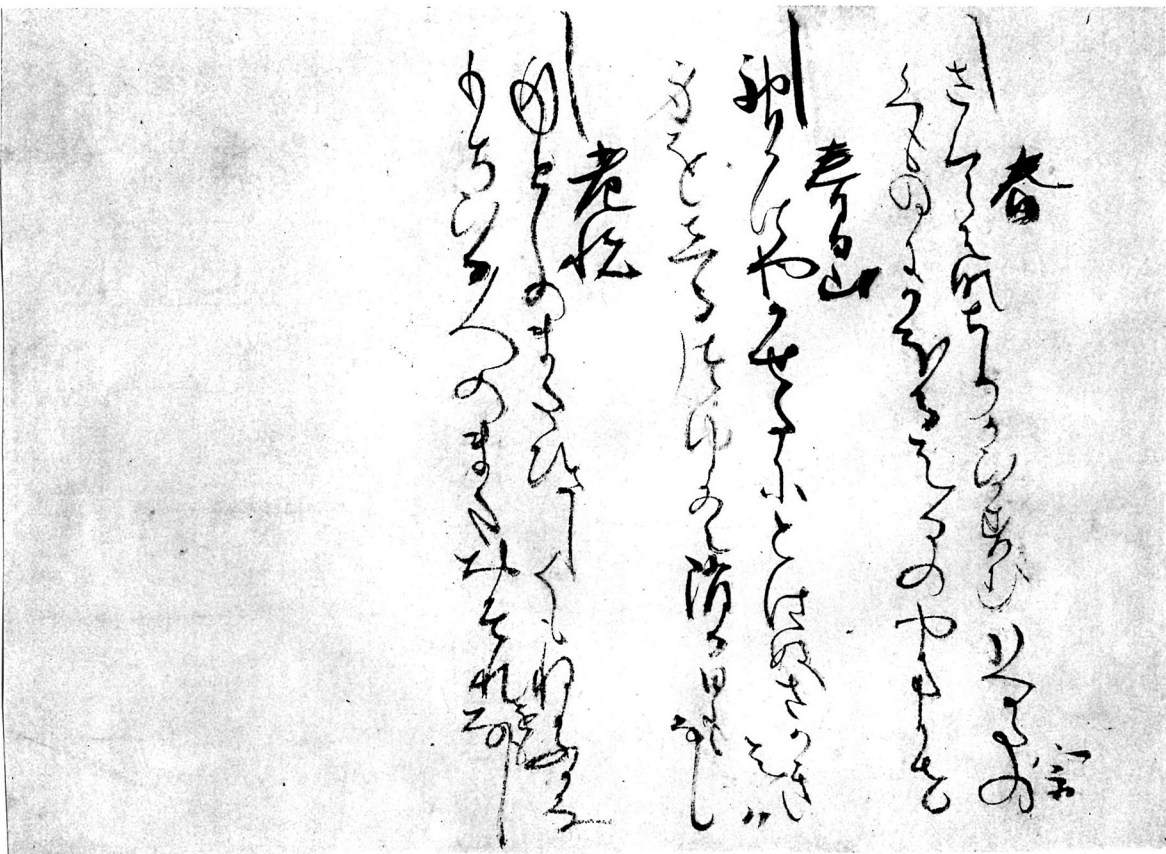
資料⑨ 定家自筆「歌合切」（通具俊成卿女歌合）一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵



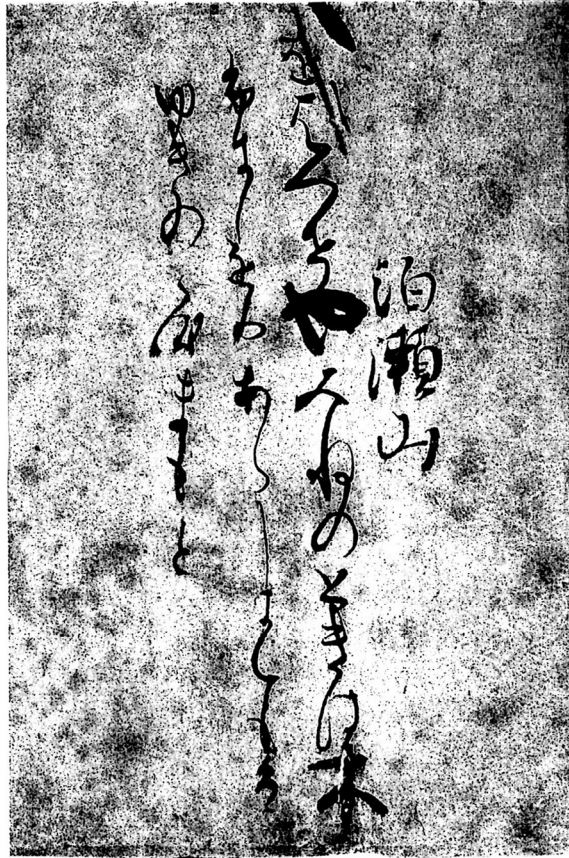
資料⑩ 定家自筆『反古懷紙』一幅 五島美術館蔵



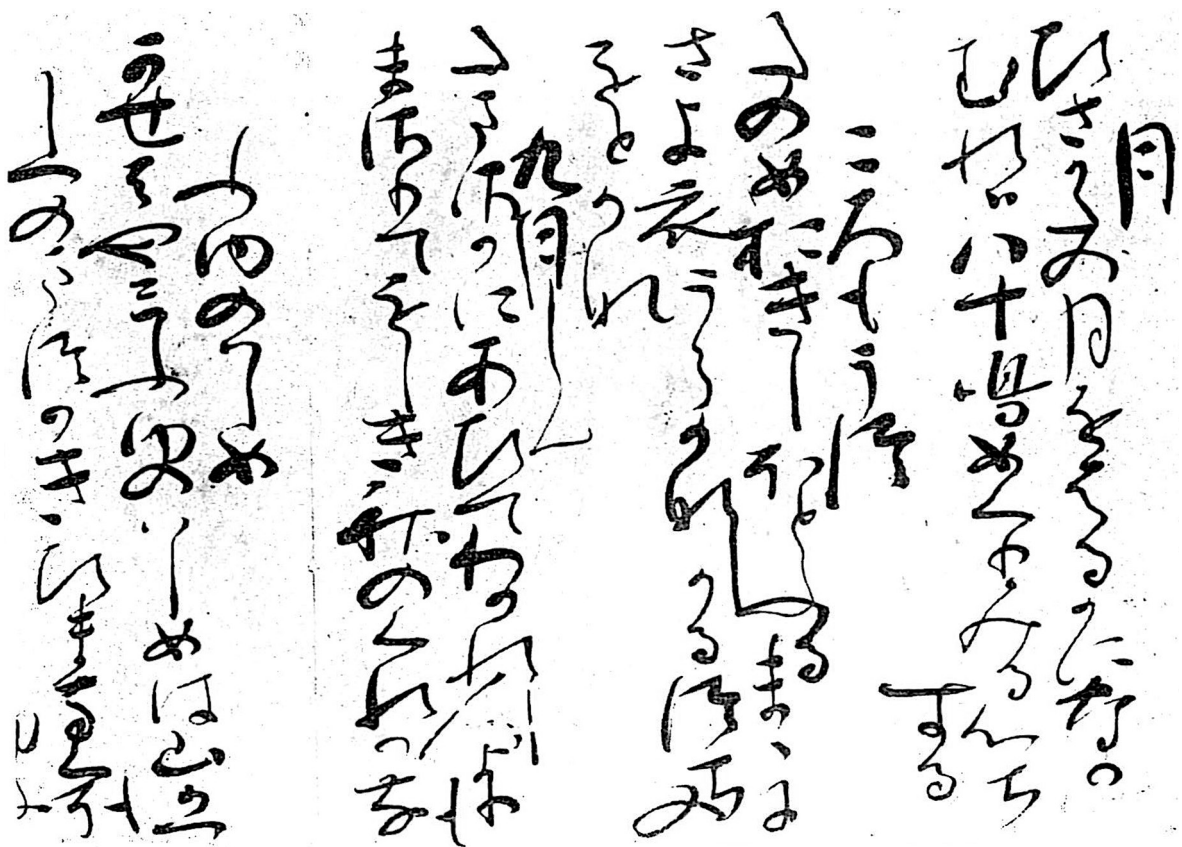
資料⑪ 定家自筆『三首詠草切』一幅 一般社団法人書芸文化院・春敬記念書道文庫蔵







資料⑭ 定家自筆『詠草』一幅 陽明文庫蔵



資料⑮ 定家真筆『一宮紀伊集』一冊（部分） 天理図書館蔵



資料  
⑮

国宝

定家真筆

古今和歌

一冊

冷泉

永時雨亭文

平蔵

古今和歌集卷第一

卷三十一

看しちふゝはふめ

在熙元

[illegible]

人々、ちんぷにや

[illegible]

春霞<sup>ハルカ</sup>やうな<sup>ハルカ</sup>ものも<sup>ハルカ</sup>の山<sup>ハルカ</sup>より<sup>ハルカ</sup>。

二葉のまきものゝめづる  
雪の内は春をきこふといふはなをきこふ今や

梅のつぼみはさくらより  
あけぬき

雪の木より  
ちるをよめる

春うてんやうくしつ雪のかゝる夜はこゝろよく

にやうやくとせしむるを、  
 多量のいんぎの積蓄にほかに、  
 うる

資料  
①9

重要文化財・定家真筆

詠十五首和歌

(部分)

前田育徳会蔵

門田吹入一巻

ゆきあいのをふくへ

月  
前  
懷  
舊

しるしに袖よりけしむる新の月

2 いとせののこま (1)

里紅

新入會之入志之平次

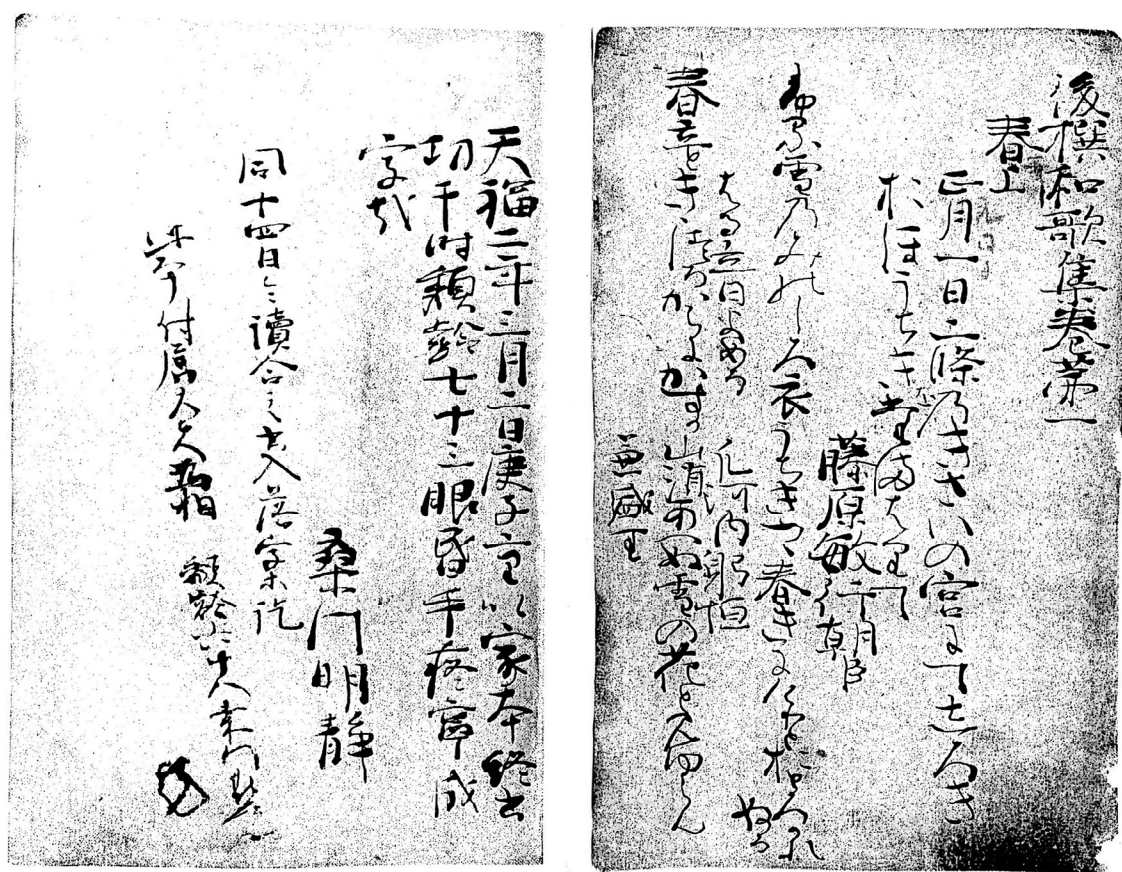
千石入海下

白

三才圖會

五  
十

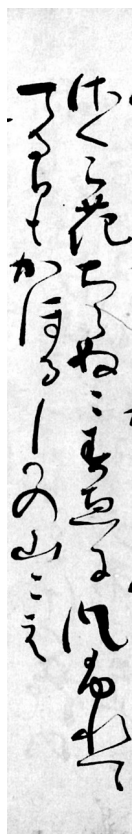
**Figure 1**



資料② 定家自筆『拾遺愚草 上下』冷泉家時雨亭文庫蔵(2)  
六〇一番歌



六〇五番歌



# A Study of the Standard Text of Lord Sadaie Fujiwara's *Gekan-syu*

YOSHIDA Kieko

Department of Japanese Literature  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies

## Summary

This paper is a preliminary study to elucidate why Lord Sadaie Fujiwara (1162–1241) wrote *Gekan-syu*. He is well known not only as a great poet but also as a noted “Waka” (Japanese style poetry) scholar in the early Kamakura period. *Gekan-syu* is neither Lord Sadaie Fujiwara’s theory of Waka, nor his *Waka-syu* (a collection of *tankas* by his composition). In short, *Gekan-syu* is the first codified manual written by Lord Sadaie, which explains how to write Waka correctly on the booklet.

In the beginning of Edo period, the holographical *Gekan-shu* was copied by Lord Nobutada Konoe (celebrated chirographer, 1565–1614). However, since then, the holographical *Gekan-shu* has still gone missing until today. But, the manuscript of *Gekan-shu* copied by Lord Nobutada Konoe was, in the late Edo period, engraved by Keizyu Inoue (excellent wood graver, 1749–1810), and as a result the block printing has become possible. And the manuscript of *Gekan-shu* appeared with the name of “Sanmyakuin Kanpaku-rin Teikakyo sho” in the encyclopedia: *Gunsho Itchiran* edited by Masayosi Ozaki (1755–1827).

At present, it is fortunate that two printed manuscript books of *Gekan-syu* exist, namely *Sadaie-kyo Syosiki* and *Sadaie-kyo Mohon*. However, the two printed manuscripts have no Lord Sadaie Fujiwara’s autograph and date. Therefore, from a calligrapher’s point of view, I have compared *Gekan-syu*’s writings in the two printed manuscript books with Sadaie’s authentic hand writings.

In consequence of exhaustive examinations, I have recognized that the two printed books of *Gekan-syu*’s handwritings are certainly in the authentic hand writing style of Lord Sadaie. For this reason, it is possible for us to regard this as credible data and to substitute the two printed manuscript books of *Gekan-shu* for the holographical *Gekan-shu*. Accordingly, it is reasonable that we will consider, as the reliable standard text of *Gekan-shu*, the two printed manuscript books included in *Sadaie-kyo syo-siki* (complete edition).

**Key words:** Lord Sadaie Fujiwara’s *Gekan-syu*, The authentic hand writing style of Lord Sadaie, The two printed books of *Gekan-syu*